

---

# 熊本空港攻防戦 ～悪夢果つるまで～

FLASH

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

熊本空港攻防戦　～悪夢果つるまで～

### 【Nコード】

N1138E

### 【作者名】

FLASH

### 【あらすじ】

「高機動幻想ガンパレード・マーチ」の二次創作小説です。5121小隊も出てきますが、一応熊本航空隊を中心とした自衛軍メイソってことで。1999年5月。人類は失われようとしている九州で、絶望的な抵抗を繰り広げていた。その中で5121小隊は、そして自衛軍はどのように戦ったのか。久し振りの戦闘シリアスものです。

## 第1話

1999年5月7日(金) 2300時

熊本市 戸島3丁目付近

夜の帳が、辺りを包む。

以前ならこのあたりは、それなりの住宅街として夜ともなればそれなりの光とあたたかな人の営みに包まれていたはずであったが、今はもうそのような面影は見るべくもない。

あるのは黒く焼き焦げた地面と、元はなんであったか判別もつかぬような瓦礫の山、そして、叩くものもなく朽ち果てていった亡骸ばかりであった。

事に最後のひとつなどは、少なくとも開戦当時は可能な限りの努力が払われて回収されたものであったが、いまや人類にそのような余力はまったく残っていなかった。

そのような無縁仏たちは、敗勢明らかな現在もなお大量に生産され続けている。そして人類側は、それを阻止する手段をほぼ完全に失おうとしていた。

生あるものなど何者もないと思われた廃墟の中に、かすかに動きがあった。

人間の男だ。

周囲の闇に溶け込むような色合いの、人間の筋肉を数割増しデフォルメしたようなスタイル ウォードレスを身にまとっていた。

それだけで、その者は己の所属を声高に主張しているようでもあった。ウォードレスは学兵 少なくとも生徒会連合所属の第6世代が着用しているのはほとんどであったし、このあたりに展開している生徒会連合の部隊はさして多くはない。

彼は、ヘルメットをかぶっていなかった。

ウォードレスとセットとされるヘルメットは、同時にTIS（戦術情報システム）の端末でもある。それを持つていないということは、電子情報的に孤立しているということと同義であった。

だが彼は、それをさして気にするふうでもなく、わずかな遮蔽物から遮蔽物へと、ウォードレスなしでもこれならば、と思わせるような鍛え抜かれた肉体を惜しげもなく泥に押しつけていた。

そのことから、彼が相当なヴェテランであるということが分かる。歩兵の 生徒会連合風に言うならスカウトの 生存確率は、いかに泥にまみれるかによって決まるからだった。

当然かもしれない。

いまや知らぬ者はなく、同時に熊本最後の希望などと、少なくとも本人たちには迷惑千万な尊称を奉られている生徒会連合第5121独立対戦車小隊、その柱石たる小隊付き戦士・若宮にとって、それは文字通り、生まれたときから叩き込まれた経験と知識であったからだ。

一部ではまさに地に這いながら、若宮は慎重にあたりを伺い続けた。今のところ周囲に敵の気配は感じられない。

だが、彼の精悍な顔は引き締められたままだった。

主戦力はともかく、どこにはぐれ幻獣があるか分かったものではないし、それこそ奇襲を得意とする幻獣 第5世代も存在する。油断はできなかった。

彼個人の状況もはなはだ心もとないものだった。幸いにもウォードレスは今のところ問題なかったが、センサー系の一部に異常が発生している。今の彼は電子的には目をふさがれたも同然であるから昔ながらのアイボール・センサーに頼るほかはない。彼が自衛軍仕様の暗視装置を装着しているのは、そういう理由もあった。

もっとも、仮にセンサーが正常であったとしても、肝心のTISは情報も入らず、通信も断絶気味でほとんど役に立たない状況だったから、大した問題ではないのかもしれないかった。

彼方で、くぐもった爆音が数回発生した。

若宮は素早く身を潜めたが、音から素早く距離のあたりをつけ、直接的な脅威ではないと判断した。振り返った時に目に入った光景も、彼の判断を肯定していた。

なにもかもが焼き払われてしまった結果、やけに見通しのよくなつた西側に、九州自動車道の高架がぼんやりと赤黒く浮かび上がっていた。熊本市街中心部方面の空は燃え上がり、ときおりわずかな火閃と爆煙、そして先ほども聞いた爆音が起こる。

熊本市は、劫火の中に飲み込まれようとしていた。

若宮はわずかに顔をしかめると、それ以上振り返ることはせず足並みを少しだけ早めた。

個人的感情よりも今は任務が優先されるべきであり、それこそが量産型兵士として「製造」された若宮に求められているものでもあった。

\*\*\*

東に向かって歩いていると、少しずつ情景が変わり始めた。廃墟なのは相変わらずだが、それでもちらほらと焼け残った建物がいくつか目に入り始める。むろん、そこに人影はなかったが。

相変わらずの無人地帯を通り抜け、若宮はふと足を止めた。彼の目の前には戸島という名の、山と言うにはいささかかわいらしい丘陵があった。

若宮は正面を避け、山の脇へと回る。

「誰か？」

数歩も行かぬうちに、山へと続く道の脇、半ば崩れた民家の影から小さな声が上がった。暗視装置をつけた若宮の目には、彼と同じような格好をした女性兵士が自分に向けて　ただし射線はかなりふらふらしていたが　ライフルを構えているのが見えた。

彼はわずかに苦笑すると、慌てる様子もなく予め定められた言葉

を口にした。

「黒」

「三毛　おかえりなさい、お疲れ様です」

自分の方がよほど疲れているような声で、彼女　田辺は銃口を天に向けた。家の中に残っていた椅子などを使って出来る限り楽な姿勢をとっていたはずであるが、身体に染み付いた疲労はそんなものではなかなか癒されなかったようだ。

「十翼長も、歩哨お疲れ様であります」

「いえ、戦士に比べればこのくらいは……。部隊はこの山を中心に展開しています。新しい司令部へはここから上ってください。あ、そういうえば食事の準備もできているはずですよ」

「有難くあります。では」

若宮は、ちよつとだけ茶目を含んだ表情で敬礼をしてみせた。田辺が生真面目に答礼するのを見て素直な笑みを浮かべると、彼女が指し示した道筋に従って石段を上っていく。

ここだけはなぎ払われることもなく樹木が残っており、大海の中の小島のように視線を遮っている。現状においての隠れ家としては、まず申し分がなかった。

湿った草の匂いが辺りに満ちている。その中にわずかに混じる死臭をあえて無視すると、若宮はだまって石段を上り続ける。その表情には先ほどの笑みなどかけらも残っておらず、ただ兵士としての成分を凝縮したような無表情が浮かんでいた。

やはり、だいぶきついかな。

もともと歩哨は、最低でもふたり一組で行うものとされている。

小隊司令　善行上級万翼長が、その程度のことを把握していないわけがなかった。なにしろ彼は、若宮自らが徹底的に鍛え上げた生徒でもあるのだから、本気で忘れていたとすれば、若宮は丁寧にそれを指摘したあとで、徹底的な再訓練を課したであろう。

だが、それは考えにくい。

となれば、つまりは部隊の状況がそれだけ厳しいということでも

あった。すでに数名の戦死者も出している現状では、むしろそれは当然というべきでもある。

それでも、ほかに比べればだいぶまし、か。

若宮の言うとおり、歴史上の存在だけになってしまった部隊など枚挙に暇はなかったから、それに比べれば戦力を維持できているだけ上等でもある。

だからといって、逝ってしまった者たちが帰ってくるわけでもないのだが。

ほどなく、やや開けた場所に出た。元は社があつたのかもしれないが、ここだけはこの山で不運の極みというべきか、流れ弾の直撃で消失していた。

そこを片付けてできた多少の広場にテントらしきものが幾張りか建てられていた。田辺の言う「司令部」に間違いなかった。

そのうちのひとつ、明かりの漏れている大き目のテントの前にも歩哨役が立っていた。若宮に負けず劣らずのうっそりとした巨体は、まるでテントそのものを覆い隠そうとしているようにも見えた。

「よう、警備ご苦労さん」

白い帽子がかすかに揺れた。歩哨　来須はわずかに姿勢を改める。

「……こちらの報告は済んだ。行ってこい」

「了解。じゃ、すまんが通させてもらうぞ」

来須は苦笑を浮かべると、身体を端に寄せる。

「若宮戦士、入ります」

暗視装置を外し、入り口の布をめくり上げると、煌々とした明かりが若宮の目を貫いた。実際には室内にはなんとも頼りないランタンがひとつ灯されているだけだったが、それでも闇に慣れた彼の目には十分すぎるほどに強かった。

中では数名の人間がさまざまな業務にいそしんでいた。湿った空気と久し振りに嗅ぐ食物の匂いの中、若宮は内部を一瞥し、すぐに

目的の人物を見つけ出す。

「ああ、戦士。ご苦労でした」

善行は中指で眼鏡を押し上げると、わずかに微笑んでみせた。そのまま手近にあった折りたたみ椅子を指し示してみせる。若宮は素直にそれに腰を下ろしたが、そのとたんに身体の力が一挙に抜けそうになり、愕然とした。

本人も意識しないうちに、やはり疲労が相当蓄積していたようであった。彼は暗くなりかける視界を意志の力でどうにか引き戻すと、ちゃんと背筋を伸ばした。

「若宮戦士、陣地西部の偵察を完了いたしました。報告をいたしましたありますが、よろしいでしょうか？」

その間、善行は何もいわなかったが、若宮が姿勢を正すと、日常会話を交わすような口調で話し始めた。

「どうぞ」

「その前に」

「？」

「この明かりが、漏れております」

何気ない一言に、善行の表情は一瞬痙攣したように思われた。彼は数秒ほどそのまま黙考していたが、やがてその顔に苦笑がにじむ。

「……私もだいぶ、ボケが来たかもしれませんね、戦士？」

「その時は、私が改めてご指導させていただきます」

「有難い話ですね」

彼らなりの反省と指導を済ませると、善行はそのまま、手近にいた加藤に声をかけて周囲の目張りを指示し、若宮に先を促した。

「……報告は以上であります」

「ふむ……」

若宮の報告を総合するならば、少なくとも現時点では部隊に差し迫った脅威は存在しない。これはだいぶ明るいニュースといっていた。かった。



だが逆に言えば、安心材料はそのくらいしかない、というのが本音である。

「瀬戸口君、他部隊との連絡状況は？」

「よく言つて、火事場の騒ぎつてところですかね」

傍らで野戦用無線機を操作していた瀬戸口が、ヘッドセットを外しながら現状を要約してみせた。いつものコンソールと少し仕様が違うので使いにくそうだった。

まあ、こんな山の中に指揮車を持つてくるわけにもいかないし、そもそもその指揮車にしてからが3日前の戦闘で失われていたから、いずれにしてもどうしようのない話であつた。

「ともかく、通信自体が断続的で、まともな意味のある情報が上がつてません。少なくとも熊本市内の連中は、通信をしているところじゃないのかまったくのだんまりです」

「東部は？」

「火事場騒ぎなのは同じですが、そつちは少しマシです。撤収作戦本部との通信は維持されています。が、増援は期待するな、とのことでした」

ある意味それは予想された返答であつたので、今さら善行も驚きはしない。だが、ちよつとした落胆まで抱かぬわけにはいかなかった。

「……分かりました。引き続き情報収集を進めてください。ああ、若宮戦士、あなたは少し休んでください。向ここのテントに食事と寝床が用意してあります」

「はっ、では」

若宮は椅子から根を引き剥がすように立ち上がると敬礼し、テントを出て行つた。

善行はしばらくその場で何事かを考えていたが、ふいに何かを思い出したように瀬戸口のほうを振り向いた。

「そつといえ、東原さんの様子はどうですか？」

「さつき見たら、ぐっすり寝ていましたよ。あの子もなんだかんだ

で働きづめでしたからね」

瀬戸口の声にはかすかに険が含まれていたが、表情には理解と納得の色が浮かんでいた。感情と理性のちよつとしたせめぎあいの後、どうやら理性が勝利を収めたようである。彼の声はいつもの調子に戻っていた。

「ともかく今は、休養させてやりましょう。そのうち嫌でもまた働いてもらわねけりやならないんですし」

「……そうですね」

偽善だな。

善行は心中でつぶやいた。自らの心に湧き上がった満足感に対してのものだった。

確かにわずか9歳の少女には休息すべき時間が必要であつたが、それは同時に、また明日以降戦いに引きずり込むための準備でもある。部隊独自の事情からやむをえないことであるとはいえ、善行は自らのなしていることに限りない嫌悪感を覚えていた。

だが、それでも休息命令を出したこと自体は問題がないと考えてもいる。

例え偽善であろうとも、この世の中には為されるべきことがあるはずであり、それを実行するのであればなんら恥ずべきことではない、と信じることは必要だと思われたからだ。

たとえそれが、最終的に無に帰する可能性があつたとしても。

(つづく)

## 第2話

表に出るのを待ちかねていたかのように、若宮の腹が情けない音を立てた。

「むう……」

若宮は腹の辺りを軽くなでながら苦笑を浮かべた。なんだかんだと騒ぎに紛れていたが、10時間近く食事を摂っていなければ無理もない。彼の鼻は、自然と漂ってくる匂いを探り始めていた。正直な話、誰かが業務をしながら食べたのか、食事の残り香を嗅ぎながら報告をするのには、なかなかつらいものがあつたのだ。

それにしても、食事の匂いを探すということは外に匂いが漏れているということであり、これは決して好ましいものではないはずなのだが、本能に逆らうというのはなかなか難しいものである。

と、いささか油断していた若宮の背後に、ふっ、と気配が生まれた。

「！」

瞬転、若宮はその体格からは想像もできない俊敏さで距離をとり、背後を振り向いた。やや落とし気味の姿勢のまま、手にはいつの間にかカトラスまで握られている。

だが、次の瞬間には、闇の中の人影が両手をちよつと待てというように上げていることに気がついた。同時に相手の正体を理解し、彼は素早くカトラスを収めた。

「千翼長……。まったく、おどかしっこはなしに願いますよ」

「ごめんごめん、つい、ね。戦士、偵察お疲れさま」

癖のある柔らかな黒髪をかきながら、千翼長　速水はすまなそうに詫びの言葉を口にした。彼もまたウオードレスに身を包み、手には厚手のパックのような物を提げている。

「千翼長、お休みになられていたんでは？」

「うん、さっきまで少し休ませてもらってたんだ。今から見張りに

つくところだよ」

「それは、お疲れさまです」

本当に、な。

若宮は速水に素早い一瞥を与え、彼の状態をたちまちに見て取っていた。多少休んだというのが本当であったとしても、それはどうやら肉体的には大した足しになっていないようだ。

速水もまた、これまで見た者たちと同じように、澱みのようにどうしようもないほどにたまった疲労が、ウオードレスごしにさえ全身に浮き出ている。目に意志の光が残っているのが休んだ唯一の効果と言ってもいいほどであった。

「……若宮さん」

速水は、若宮にだけ聞こえるような小声でつぶやくように言った。  
「ん、なんだ？」

若宮は脳内のスイッチをいくつか切り替え、かなり砕けた調子で応じる。そうであることを速水の物言いは要求していた。

「表の様子はどうでした？ ここからでは時おり爆音が聞こえるくらいでしたけど……」

「……どこもかしこもひどいもんさ。この辺りは包囲されていないってだけ、まだましだけどな。それも時間の問題だし、まあ、ここで戦えるのもそう長いことじゃなかるうな」

若宮の口調は、歯に衣着せぬものだった。

これまでのつきあいで、この春風駘蕩とっていいような雰囲気を持つ少年の別の一面について、若宮は全てとはいわないが、かなりの部分を理解していた。指揮官をやらせたら恐ろしくも面白くもあろうと思わせる彼には、言葉を飾ることもあいまいに濁すのも無意味なことであった。

「そう、やっぱり……」

「ここは、えらく目立つからな」

一見、現状とは矛盾するような言葉であった。だが、理由のあることである。

確かにこの山は樹木に覆われており、かなりの掩蔽効果が期待できたが、同時にこの周辺では唯一の「高地」といつてよかった。もし敵が進攻してきたら、ここを見逃すことなどまずあり得ないし、全力を持って攻撃を仕掛けてくるであろう、そういうことだ。

軍隊は、高地を好む。例外はあれど、たいていの場合にはまるで砂糖に蟻が群がるように、高いところを目指し、占拠しようとする。

高いところに登れば、遠くがよく見えるという一点においてだけでも、その理由は十分に理解できるであろう。

そんな絶好の防御・観測地点にして最激戦の候補地であっても、それでも彼らはそこに籠もらざるを得ない。平地にぼつと突っ立っただけは敵のいい的ではないし、少しでも時間を稼ぐための防御拠点は、それだけで守るだけの価値があった。

「それじゃ、せいぜいしつかりと見張らないといけませんね」

そのあたりは速水にも見当がついていたらしく、口にしてはそう言っただけであった。だが若宮には、わずかに彼の目の光が強くなったのがわかった。

若宮はかすかに息をつく、場違いなほどにひょうきんな声を上げた。

「さて、そろそろおいとましてもいいかな？ さすがに腹が減っちゃってな……」

「あつ……。すっかり引き留めちゃってごめんなさい。それじゃ、行つてきます」

速水がすまなさそうに頭を下げるのに、若宮は笑みを浮かべたま軽く手を振って見せた。

「いいさ。御苦労さん、気をつけてな」

速水はもう一度頭を下げると、闇の中に姿を消した。若宮は葉ずれの音を聞きながらしばらくその場に立っていたが、やがてそれも消え去ると、肩の力を抜いて感心したようにつぶやいた。

「……大したもんだぜ、この期に及んで、まだ勝つ気でいやがる」  
ヴェテランは余計な願望を抱かない。現状を正確に分析し対処す

ることが、生き残る確率が最も高い方法だからだ。戦場で夢を見るような奴は、たいてい長生きはできない。

だが、速水のそれは、夢というのとはちょっと違うように若宮には思われた。どこが、と言われると困ってしまうが、ともかくそう感じられたのだ。善行といい速水といい、そして彼のパートナーといい、ここにいるのはどうにも諦めの悪い連中であるのは間違いない。となれば、明日は いや、もう今日だった は、より一層面倒なことになるであろう。

「ならば、俺のやることは決まっているな」

また再び戦い続けられるよう、飯を食い、わずかでも睡眠をとる。そう決めると、若宮は傍らのテントを覗きこんだ。そこでは数名の男子が泥のように眠り込んでいた。

ほとんど蚕棚と変わらぬスペースではあるが、確かにひとつ空きがある。ウオードレスのままであっても、横になれるのなら王侯貴族並の贅沢というものである。

彼はそれだけを確かめると、速水が出てきたテントへと入り込んだ。

一通りのことを済ませて若宮が眠りについたのは、それから7分後のことであつた。

\*\*\*

若宮がしばらくぶりの快楽に浸っていた頃、速水はただひとり、細い山道を山頂へと向かっていた。

ようやく人が通れるかと思われる細い獣道を、なるべく音を立たないように上っていく。先ほどの報告である程度の安心はあつたが、用心をしてしすぎるということはなかった。

もともとたいした標高があるわけでもない。わずかにかさ、かさという葉ずれの音を共に、程なく彼は山頂へと到達した。

このあたりも樹木に覆われてはいたが、いささか人為的ながら他

よりはよほど開けている。ここが5121小隊の観測拠点1号というわけだった。

視界が開けたことで、速水の動きはさらに慎重なものとなった。過去の経験が彼にそれを要求していたのだ。その理由はと問われれば、目の前で、戦友が狙撃兵に 第5世代はそんな者まで投入していた 頭蓋を撃ち抜かれる瞬間を見れば、誰もが深く同意するに違いなかった。

「……舞？」

あたりをはばかりる小声で、そつと呼ばわる。

返事はなく、かすかに戦場音楽とそれとは異なる爆音が聞こえるばかりであった。

もしや場所を間違えたかと、速水は忙しくあたりを見回した。先ほど別れた大きな岩が目の前にある。間違いなかった。

もう一度呼ぶべきかためらっていると、岩の上のほうからかすかな応えがあった。

「厚志、どこを見ている。こっちだ」

声が聞こえた瞬間、速水は素早く反応した。ワードレスの倍力装置を5倍にセットすると、ほんのひと動作で岩の上に音もなく降り立った。

舞は、ちょうど岩が段差を持っているあたりに腰掛けていた。他の者とは違い、顔を覆うバイザーこそつけていないが、ヘルメットもきちんと規程どおりにかぶっている。

彼女もまた、ひとりで見張りに立っていた。

「こんなところにいたのか、びっくりしちゃったよ」

「こちらの方が見晴らしがいいからな」

ヘルメットは、その代償というわけだ。これなら少なくとも、狙撃者の高速ライフル弾に対し、濡れたティッシュペーパー程度の防御力は期待できる。

それについて速水は何事かを言いかけ、口元だけに小さく苦笑を浮かべた。

むろん舞のことだから、その程度のことに気がついていないはずがない。それでも、あらゆる事情を勘案した上でこの方法が最善であり、危険は看過すべき代償であると判断したのだ。

舞らしいや。

こんな時でも、いや、こんな時だからか、舞が舞以外の何者でもないということを再確認できたことは、速水にとって大変に気分がよいことであつた。

どうやら、その気分が表にも出ていたらしい。舞は怪訝そうな表情を浮かべると小首をかしげた。

「どうした厚志、そなた、何をそんなにニヤニヤとしているのだ？」

「ん、いや、別に？」

「相変わらず、そういうところはヘンな奴だな……。まあよい。そなたの装備を返すぞ」

舞は傍らに立てかけてあつたライフルを手にとると、弾倉の詰まつたパウチごと速水に向かって差し出した。

普段なら明確な規程違反というところだが、規程を守つたがために弾薬不足で突破されたら、何のための規則か分からなくなつてしまふ。法も、多少の柔軟な運用は必要であつた。

「ありがとう。じゃ、はいこれ。まだあつたかいよ」

「ああ、すまぬな」

舞は自分の装備を手渡すと、パックを受け取つた。これからは速水が約2時間の歩哨に立つことになる。

そんなことを考えていたら何かに気がついたのか、今度は舞が速水の顔に視線を投げかけた。

「ん？ どうしたの？」

「いや、なんだ……。そなた」

「？」

「ひどい顔だな」

速水は一瞬目を見開いたが、やがてニヤリと笑みを浮かべた。

「まあね、さすがに風呂上りと同じ、って訳にはいかないよ」



「そうだな」

舞が真面目くさった表情でうなずくのに、速水は笑みを返した。舞が彼女なりの冗談で気分転換を図らせてくれたのがわかったので、特に怒りは覚えない。

「では、私は戻る。……気をつける」

「分かつてる。じゃあね」

短い挨拶の後、歩哨の引き継ぎは無事に終わった。

舞は岩から飛び降りると、速水のたどってきた道を下り始めた。恐らく彼は気にもしないだろうが、歩哨のために神経を集中し始めた彼の脇で飯の匂いをさせるわけにはいかなかった。

しばらく歩いたところで座り込み、パックを開けた。速水の言ったとおり、手渡されたパック　野戦糧食はまだ温もりを残しており、封を切ると中の飯から湯気さえ上がっている。

彼女はそれを、スプーンも使わずに少しパックから押し出すと直接かじりだした。もともとこのタイプはそのままでも食べられるよう工夫がされているので、戦闘時の正しい食事マナーであるとも言える。味もほとんどないただの白飯であったが、嚙んでいるうちにわずかな甘みが口中に広がりだした。

ともかくまともに調理した食事が食えるのだ。華やかさに欠けることなど瑣末な問題というべきであった。

「それにしても……」

飯を平らげ、ようやく人心地がついた後で、舞は苦笑を浮かべながら自らの顔に手をやった。脂と泥の混じった、ねばねばしたものが指先に張り付いた。

「……私も、人のことは言えんか」

作戦開始からこのかた、戦い、生存するのが先で、それ以外のことなどに気を使う余裕はまったくなかったのだから無理もない。ウオードレスも人工筋肉への栄養補給とサニタリー　つまり、トイレパック　の交換以外は事実上行えず、シャワーなど最後に浴び

たのはいつなのか、それすらはつきり覚えていないありさまであった。

それでもここまでどうにか生き残ったのだ。

すでにこの世ではないどこかへ旅立ってしまったものたちに比べればまだましなのかも知れぬ。小隊から何名かそれにつき従ってしまったっている現状では、さらに贅沢などいえたものではない。

とはいえ、すでに部隊は限界というものすら通り越しており、生き残っていることが果たして幸運なのか、いささか怪しくなっていることもまた事実であった。

部隊の主力兵器であり、今は山陰で必死の整備を受けている人型戦車・士魂号も、かつてのような俊敏な動きはもはや期待できない。それでも動いているのはある意味奇跡のようなものであったが、今ではもう足を止め腰を据え、十分な遮蔽物に身を隠した上で砲台になるしかまともに戦う手段は残されていなかった。

それでも、可能な限り戦闘能力は残されなければならなかった。

そう、せめてあと2〜3日は。

現状においてそれは、婉曲に言ってもいささか難しいものではあったが、なんとかしてもやり遂げなければならなかった。

「戦場こそ我が故郷、不可能を可能にし、事を成し遂げるが芝村としての本懐、……ではあるが、なるほどこれはちと厳しいかもしれないな」

それでも舞の顔に絶望の色はない。諦めという言葉は、今のところ彼女の辞書のどこを探しても見つからなかった。

その時、突如天をも切り裂くような金属音があたりを圧し、なにかが頭上を覆い隠すかのように通り抜けていった。

舞は一瞬身体を硬くしたが、場違いなほどの白いその姿を見て、警戒態勢を緩める。白い羽根は端のほうに赤と緑の輝きを点灯させながら通り過ぎていった。

民間のジェット旅客機が、今まさに最終侵入行程を終えようとし

ていたのだ。ここからほんの数キロ先には彼らの巢　熊本空港がある。

旅客機は白い大きな翼をはためかせるようにして、ゆっくりと舞い降りていった。まったくその姿は血と鉄で彩られた戦場には不似合いな、天使のようにも思われた。

全てのものに救いを与える大天使。  
アーケ・エンジェル

いま、その天使たちのよりどころを、同じく天使の名を冠する土<sup>ケ</sup>魂号<sup>ルビム</sup>が守っていることに、舞はなんとなくおかしみを感じていた。

そう、ここは単なる防衛拠点というだけでなく、彼女らを鉄血の暴風から守るべき楯でもあるのだ。

舞は旅客機の降りていった方角へと顔を向けた。何もかもが炎と幻獣の瞳と人血で赤く、紅く染められてしまったこの世界の中で、ただ唯一の希望のように青白い光がぼんやりとした夜空を染めていた。

それは確かに、舞たちにとってもまさに希望の光と言ってもよかった。たとえそれが地獄に垂らされた蜘蛛の糸よりか細いものであろうとも、ないよりはずっとましである。

希望は時に人を苦しめもするが、それでもいついかなる時でも失ってはならないものなのだから。

(つづく)

### 第3話

地獄のように思える場所は数あれど、真の地獄はこの世には存在しない。

また同様に、真の天国もこの世には存在しないのだ。

1999年5月7日(金) 2350時

熊本空港付近

舞に「希望」という言葉を考えさせたジェット旅客機 全日本空輸のチャーター便は、安定した飛行で最終進入行程へと進んでいた。

それは現状からすれば信じがたいところがあるが、この安定を作り出すためにこそ、5121小隊を初めとする九州の全軍は戦っているのだと言ってもよかった。

「熊本コントロール、こちら934便、最終進入行程に入った」

『こちら熊本GC、滑走路上に異常なし。進入を許可する。現在誘導路上で日本航空1332便がターミナルに向けて移動中。注意されたし』

「こちら934便、了解した。……まったく、満員御礼とはこのことだなあ」

地上管制との通信を切ると、機長の佐伯は小さく息をついた。この空域には自分たちのほかに2機が進入待ちをしており、また、ターミナルには4機が駐機し、また、離陸の順番を待っていた。

軍用としての機能を期待されたがために、第二種空港から共用飛行場への種別換えを行われ、増設により3000メートル級の滑走路を平行に2本保有するようになった熊本空港であるが、それにしても平時であれば考えられないような過密振りであった。

佐伯自身、今日だけですでに4回目の熊本行きである。しかも行

き先は広島が2回、松山が1回、そしてこの後は小松というようにバラバラであった。

なれば、普段なら一定の航路を往復することが多い彼らクルーの疲労は並々ならぬものがあるはずだったが、それについて文句を言うものは誰もいなかった。何もかもが火事場騒ぎのような状況の中で、少しでも空きのある空港へ潜り込むには、そのくらいの芸当が必要なのだ。

佐伯は、その芸当の回数を増やすべく、計器類にもう一度目を通した。操縦系統もエンジンも、今のところは文句を言わずに順調に動いてくれている。

だが、今日はこれだけの無茶をしているのだ。明日こそは大掛かりな整備が必要になるはずだった。

「……この後、今日もう1回　いや明日か　飛行して、その後整備で、次は9日になるかな？」

「そうですね。よくこいつも頑張ってくれてますよ」

副操縦士の三浦が、軽いともいえそうな口調で答えた。

佐伯は何も言わない。声はともかく、三浦の視線と手はちゃんと職務をこなしていた。

「まあな。さすがに軍用機がベースだけある、つてところかな」

佐伯の言つとおり、この機体　川崎C-737は、航空自衛軍も納入されている中型輸送機の民間仕様であり、いざとなれば草原にでも着陸できるという、ロシア機譲りの足回りの頑丈さには定評があった。また状況に鑑み、この機体には航続距離や各種飛行特性の減少を覚悟で、重要部分には応急の防弾措置が施されている。

まさに戦場の真っ只中に飛び込むには多少なりとも心強いものがあつたが、佐伯はここまで変貌してしまったこの機体の原型がただの旅客機であつたなど、いまだに信じがたいところがあつた。

川崎C-737は、ボーイング737型旅客機の入手が事実上入手不可になったことを受け、川崎が半ば無断で設計のコピーと改造を行った機体なのだ。

暗闇の中に、赤と緑の滑走路灯が浮かび上がる。934便はむしろゆったりとした動きで滑走路に進入し、車輪を地に着けた。

足元から盛大な白煙が上がり、同時に背筋が寒くなるような逆噴射音が辺りに轟いた。期待は急速に行き足を殺しながら滑走路端へと向かい、ターンしながら誘導路へと入ろうとしたが、そこで管制塔からストップが入った。次の離陸予定の機体が、いまだ出発していないのだという。

「どうした、何かあったのか？」

『航空自衛軍の戦闘機が緊急発進する。徳島空港行きの航空自衛軍086号機は5分後に出発予定』

「了解」

スクランブルじゃ、仕方ないな。

正直なところ、早くターミナルに着きたくて仕方がなかった。空を飛びたくてパイロットになりたかったのは確かであったが、それはこんな銃弾が飛び交うようなところでというわけではない。緊張のせいか変な頭痛もしてきている。文句を言う気はさらさらないが、いい加減少しくらいは身体を伸ばしたくもなっていた。

と、ターミナルの反対側から、旅客機とはまた違う鋭い金属音が響き渡ったと思うと、小さな機影が2機、するすると闇の中を滑走路に向かって動き出した。

滑走路灯やターミナルの照明で、おぼろげながら姿が見えた。

1機は航空自衛軍の主力である三菱ノスホーイF14「麗風」である。どこことなく鶴を連想させるスタイルは、佐伯にも見覚えがあった。

もう1機は、麗風とは似ても似つかない、ずんぐりとしたスタイルであった。機体に半ば埋め込まれたようなコックピットと、どことなく愛嬌すら感じさせる輪郭は、麗風の6割くらいの大きさしかなかった。

自身、航空自衛軍の予備役パイロットでもある佐伯はしばし脳内

の情報を検索し、やがて、あ、と小さく声を上げた。

「スカイホークじゃないか。あんなのがまだ生き残ってたのか……？」

佐伯が驚くのも無理はない。A-4スカイホークは初飛行がなんと1954年という、ヴェテランもいいところの機体であった。

もつとも、整備性や信頼性が高く、機体が頑丈な上にサイズの割に兵器搭載量が大きいということもあり、人類側のロングセラー兵器であったのは間違いないのだが、何しろ開発元のアメリカではとうの昔に生産終了になっている機体である。

よたよたという印象を強く残しながら、スカイホークは誘導路から滑走路に入ると、精一杯エンジン出力を上げて離陸にかかる。横腹には外国義勇軍を示すマークと、元の国籍が描かれていた。

「イスラエルか……。遠いところをご苦労なこつた」

ということとは、あの機体はイスラエル向けに生産されたA-4Hだろうか。距離もあるし、さすがに佐伯にもそこまで分からなかったが、エンジン音から察するに、やはり疲労は隠せない、といったところであった。

「部品だつてろくになかろうになあ」

それでも飛行せねばならぬ現状と、ともかく飛行を可能ならしめている整備力に、佐伯は複雑な息を吐いた。

彼が見送る間にも、2機の機体は翼下にあれこれと装備を満載し、先ほどの佐伯たちのそれなど問題にならないほどの轟音と共に夜空へと消えていった。

『934便、ターミナル、3番ポートへと移動せよ』

「おっと、了解。いくぞ」

佐伯は意識を職務に集中させると、機体をゆっくりと移動させ始めた。今の彼はまず自分の身の安全を確保することが必要であり、同時にここから宝石よりも貴重で、なおかつすぐには何の役にも立たないであろう荷物を運び出さねばならなかった。

人のことを心配している余裕など、どこにもなかった。

そのことを思い出したのか、佐伯の背筋に震えが走る。

そうだ、あいつらが、それに陸の連中があのかつたれどもを足止めしてくれなければ、矢面に立たされるのは俺たちなんだ。頼むぜ、おい。あと少しだけ、やつらを釘付けにしてくれよ。

佐伯にとつての戦争が、これから始まるうとしていた。

ほぼ同時刻、佐伯たちとは管制塔をはさんだ反対側でも別種の戦争が行われていた。

真夜中でも自家発電によって維持されている照明で、格納庫の中は真昼のように明るかった。その下では2機の麗風が、一部外板を取り外され、内臓をむき出しにしている。周囲では整備士たちが、再び戦場に赴こうとしている2羽の鶴に、渾身の力を込めて調整を行っていた。

「ユニット2に異常発生。交換を」

「弾薬、定数確認」

「アビオニクス、自己診断開始……異常なし」

「エンジン、点検完了。外板戻します」

「燃料パイプ外せ」

「最終チェックヨシ、異常なし」

「班長、第1小隊1番機および2番機、準備完了しました！」

「よーおーし、引き出すぞ！」

報告を受けた班長 田中は、あたりの喧騒に負けないしわがれた大声で出入り口を指し示し、何かを思い出したようにくるりと後ろを振り向いた。

「レイ、ユキ、いつでもいいぜ。さっさと乗りな」

「……おやっさん、もしかして、俺たちのこと忘れてませんでした？」

田中の背後では、オレンジのフライトスーツに身を包んだパイロットがふたり、情けなさそうな表情を浮かべて立っていた。

ひとりとは古武士というのが似合いそうな精悍な表情に蓬髪、もう



ひとり役者にでもしたいような優男というやたらと目立つ組み合わせのこのふたりが、熊本航空隊第1小隊のふたりにしてトップエースである瀬崎零次少佐と高村雪之丞大尉である。

4月に始めて本格参戦してからこのかた常に最前線にあり、それに見合った戦果もたたき出しているのだが、地上に降りて翼をもがれてしまつてはどうしようもなかった。本音はさつさと乗り込みたかつたのだが、許可が下りなかったので今の今まで待ちぼうけを食らっていたのだ。

「お前らがさつさと乗らんからいかなのだろうが。ほら、行つて来い」

「これだもんなあ……。へいへい、了解ですよ」

整備を怒らせれば、後で困るのは自分である。ふたりは仕方なさそうに肩をすくめると、ラッタルを駆け上つてひらりと機体に飛び込んだ。

ざつと計器を見回す。特に問題はないようだった。

ふたりを乗せた麗風が、それぞれ牽引車で所定の位置まで引き出される。定位置についたところでコンプレッサーが接続された。

「コンタクト！」

合図と同時に2基のターボ・ファン・エンジンに生命が吹き込まれる。

「飛行前点検完了。オール・グリーン！ コントロール。こちらナイトクロウ。離陸許可求む」

「ナイトクロウ、こちらコントロール。離陸を許可する。B滑走路に進ませよ」

「ナイトクロウ了解。ブレイブ、聞いたな？ いっちょ行くか」  
『了解、さつさと行きましょう』

ナイトクロウは瀬崎の、ブレイブは高村のTACネーム（コールサイン）だ。

瀬崎は一瞬スロットルを開き、すぐにブレーキを踏む。機体はすぐに停止した。

問題なし。

瀬崎は誘導路からゆっくりとB滑走路に進入する。高村もやや遅れて、僅かに軸線をずらしながら滑走路に進入した。

「ナイトクロウ、離陸する」

同時に瀬崎はスロットルを目一杯開き、ブレーキから足を離した。まるで蹴飛ばされたような勢いで機体が前進を開始し、加速度に身体がシートに押し付けられた。

「くっ、さっすがにこれだけ積んどると重てえなあ」

今、麗風は定格限度一杯まで武装を満載していたが、これでも果たして足りるものか、瀬崎にはいささか自信がなかった。

そうこうしている間にも、機体の速度はぐんぐんと上がっていき、ついに離陸速度に達した。瀬崎が操縦桿を引くと、予想に反して麗風は素直に頭を持ち上げ、そのまま緩やかに風に乗ったように大空へと舞い上がっていく。

彼が後ろを振り向くと、高村がぴったりと後についているのが見えた。瀬崎は少しだけ笑みを浮かべると、意識を切り替える。

「コントロール、こちらナイトクロウ。これより熊本市南部への阻止攻撃を実施する」

『コントロール了解。連中をきれいに吹き飛ばしてやってくれ、以上』

本当にそうできりゃあ、楽でいいんだがな。

すでに万どころか百万のオーダーで数えた方がいい敵　幻獣に對して、今の瀬崎たちでは蚊の一刺し程度にしかないことは、言った方も言われた方もよく理解していた。

だが、それでもいくばくかの時間は稼げるし、何よりも地上でそれを必要としている友軍がいるのだ。ぐずぐずしてはいられなかった。

機首を熊本市の方へと向けると、瀬崎は下を覗き込む。眼下には先ほどまで彼らがいた熊本空港が見えていた。

すでに詳細は分からなくなっていたが、瀬崎にはターミナルビル

やその周辺に黒山のごとく集っている人たちの姿が見えたような気がし、かすかに眉をしかめた。

そこには、死と破壊からようやく逃れることのできた避難民が、眠れぬ夜を過ごしているはずであった。

救出作戦が本格化した今、熊本空港からは大車輪で脱出が進められているが、それでも空港周辺だけでも数万人が脱出の順番を待っており、そのペースは嫌になるほど遅かった。

そして、敵はすでに空港から10キロ圏内に侵入しつつある。

どこまで守りきれるものか、それを断言できるものは誰もいなかった。

(つづく)

## 第4話

1999年5月8日(土) 0025時

熊本市南部・八代市境界付近

漆黒の闇の中を、2機の麗風は南西に進路をとり飛行を続けていた。

高度は約1000フィート(約300メートル)を維持している。ジェット戦闘機としては異様に低い高度であるが、同時に目的地も目と鼻の先と言っている現状では高度を上げている暇もないし、なにより任務がそれを要求してもいた。

瀬崎たちは、なめるようないつても差し支えない飛行で一路目的地を目指す。

「普段だったら、こんな飛行をしたらお目玉を食らうとこだがな……。ひでえもんだ」

瀬崎の声には、何か失われたものを惜しむ響きがあった。

そう、確かに普段であれば、このような低空をほぼ音速で飛行したりすれば、耳をつんざくというのも甘いほどのジェット音で、あとで付近住民の苦情やらなんやらが基地に殺到したであろう。

だが、今瀬崎たちが飛ぶ熊本市は、すっかり闇の中に沈みこんでいた。普段ならそれなりに美しく輝いていたであろう地上の灯火も今はなく、べつたりと黒く塗りつぶされている。

いや、正確には真っ暗ではなかった。

視線を北のほうへと転じれば、相変わらず空は赤黒く染まっていたし、地上にも同じような光が明滅しながら徐々に領域を拡大している。もはや熊本市が荒れ狂う業火から逃れるのは不可能であった。  
葵。

その名を思うたびに、瀬崎の胸は狂おしいほどにざわめいた。それは熊本総合病院　まさに、業火に飲み込まれんとしている熊本

市中心部にある病院に入院している彼の恋人の名であった。

数日前に一応、すでに移動の準備は整えていると病院から連絡はあったが、あれから状況は急変している。そうでなくても普段から体が強いとはいえない彼女のことであるから、どうなっているか。

騒ぐ心を無理やりに押さえつけ、瀬崎は地上に視線を凝らす。よく見れば周辺部から熊本市に向かって、まるで溶岩のようにちろちろとした紅い光の筋が幾筋も流れていた。

「……ナイトクロウ、あいつら、こんなとこまで来ちゃったんですね」

「そうだな」  
彼らが見ているのは、溶岩などではない。彼らにとっての悪夢そのもの。幻獣の眼が放つ光であった。

連中は人類への憎悪と殺戮の歓喜に打ち震えながら、ゆっくりと動きだけはまさに溶岩のように熊本市に接近している。ところどころで堤防にでも当たったように動きがよどんでいるところでは、時折光の矢が幻獣に向かって伸びていたり、閃光がきらめいたりしていた。

「陸さんも頑張ってはいるみたいだが、さて、どこまで持つことやら……」

瀬崎の声に、揶揄の成分は含まれていない。むしろ、圧倒的という言葉ですら足りないほどの敵前にたちはだかり、楯として戦う彼らには畏敬に近い念すら生まれていた。もともと、そこに多少私的な雑念が紛れ込んでいたことも認めなければならないが。

頼むぜ、おい。少しでもいい、時間を稼いでやってくれ。

できることなら、眼下での戦いを手伝ってやりたかった。向こうもそれを望んでいるかもしれないが、苦戦しているのはここ1箇所ではない。今にも崩壊寸前の戦線などそれこそ掃いて捨てるほどある現状においては、ここなどまだましなほうとすら言えた。

それに、熊本航空隊の戦力は瀬崎たちを入れても総数11機。

一時は各国義勇軍や増援で収容限界に近い40機以上いたはずが、いまやこれだけしか残っておらず、支援をするにもおのずと限界があつた。

「……すまねえ」

小さく地上に向かってつぶやくと、瀬崎はもう振り返ろうとはしなかつた。

\*\*\*

やがてレシーバーから、瀬崎たちを呼ぶ声が聞こえてきた。

『ナイトクロウ、ナイトクロウ。こちらはスカイキッド21、応答せよ』

「こちらナイトクロウ、感度良好」

スカイキッドは、戦場上空に張り付いている戦術指揮機 早い

話が地上戦への戦力配分を行う機体のコールサインであつた。

『ナイトクロウ、そちらの戦力を報告せよ』

「スカイキッド21、当方はF-14 麗風2機。それぞれ翼下に500ポンド高抵抗爆弾24発、広域散布爆弾6発、36連装対地口ケットポッドを2基装備。固定武装の20ミリガトリング砲は弾薬定数800発。今より30分の戦闘機動が可能。必要なら再出撃も、だ」

『了解した。現在八代・熊本市境界付近で、生徒会連合の3個小隊が防戦を行っており、突破されかかっている。すまんが連中を支援してやってくれ。戦術チャンネルは22』

「敵の数は、相変わらずか？」

『ああ。圧倒的、というやつだな。とりあえずはやいところ行つてやってくれ。向こうに概況は連絡した。コールサインはシルバーナイト。以上』

戦術情報としては大雑把に過ぎるが、状況は瀬崎にもおおむね理解できた。いまさら怒る気にもならない。

「了解、これより支援を開始する。……ナイトクロウ、聞いたな？」  
『ええ。はいところ行きましょう』

2機の麗風は、ゆるいバンクで僅かに針路を右に振った。3個小队という事は、多くても100名を超えることはあるまい。しかもこの状況ではまともな支援も受けていないに違いなかった。

瀬崎は無線を指定されたチャンネルに合わせた。

「シルバーナイト、シルバーナイト。こちらナイトクロウ。ただいまより貴隊を支援する。状況知らせ」

『え、援軍か！？ ナイトクロウ、こちらシルバーナイト。早速だが支援を要請する！ はいところ連中をぶっ飛ばしてくれ！』

レシーバーから飛び出してきたのは、予想よりも若い声だった。もしかしたら高校生にすらなっていないのかもしれない。瀬崎はわずかに歯を食いしばると、努めて冷静な口調で言った。

「了解、シルバーナイト。こちらの位置は確認できるか？」

『ああ。当方から見て4時方向に爆音とジェット炎を確認した。6時方向に向かって遠ざかっているみたいだな』

瀬崎たちは右側に視線を向けた。4時から6時ということは、部隊はこちらの方向にいるはずだった。だが相変わらず地上は漆黒の闇と幻獣の紅に染まっており、友軍の気配は影も形もない。

瀬崎は戦況モニターを確認する。

九州上空には本州や四国から空自の偵察機が数機、危険を冒しつつ常時張り付いており、生徒会連合の秘密兵器とも言われる戦術情報指揮機「マザーボード」もいるはずだったが、このあたりに味方を示すシンボルは映し出されていなかった。

それだけ、戦場の混乱を表しているともいえだが、このままでは味方の上に投弾しかねない。

「シルバーナイト、こちらから配置が確認できない。貴隊の位置を知らせよ」

『了解。ただいまより青色信号弾を発射する。そこから北側がこちらの陣地だ……発射した』

最悪、第5世代あたりの謀略さえ疑いかけていたが、その言葉と同時に、針路右手に青い星がひとつ上空に向かって飛び上がり、それからゆっくりと降下を開始した。

それは、敵の暴虐に抵抗する弱々しい、だが確かな証でもあった。「こちらナイトクロウ。貴隊の位置を確認した。そこより南側は叩いて構わないんだな？」

『ああ。敵は戦闘開始時は数百だった。今は数千というところか……。そのうち数万になるかもしれん』

そのことで、瀬崎は連中のTISがまともに機能していないことを理解した。彼の見るところ、視界内のほとんど全ては、固まりかけの溶岩のように紅に埋め尽くされていたのだ。

『ナイトクロウ、上空から敵の様子は見えるか？』

瀬崎は一瞬だけ躊躇した後に、マイクのスイッチをオンにした。

「シルバーナイト、そいつは少しばかり控えめな表現だな。……越権は承知の上だが、後退はできるのか？」

レシーバーが一瞬沈黙する。

『……まだ後方には後退中の味方がいるし、民間人も含まれている。俺たちがここで踏ん張れば、連中は助かるかもしれないんだ』

語尾にわずかに震えがあったが、静かな声であった。

「……すまなかった。ナイトクロウはこれより支援攻撃に移る。あそれから、もう1機のコールサインはブレイブだ。どっちかを呼んでくれれば必ず支援する」

『了解。……ありがとうございます』

畜生、こんなときに丁寧でなくなっちゃっていいんだ。

瀬崎の胸中に不意に怒りがわきあがったが、何が原因なのかは当の本人にも定かではなかった。

「ブレイブ、行くぞ！」

『了解』

高村は、瀬崎がこういう口調のときはなにも言わないほうがいいことを過去の経験から十分に理解していた。



それに実のところ、彼の胸中也似たようなものであった。  
(つづく)

## 第5話

1999年5月8日(土) 0030時

熊本市南部・八代市境界付近

「空自の支援が来るぞ！ みんな、もう少し頑張れ！」

わずかの間をおいて、あちこちで歓声上がるが、それは先ほどよりもだいぶ少なくなっているようにシルバーナイト 生徒会連合第8131小隊司令である松崎百翼長には感じられた。

彼自身、数名の部下とともに陣地というにはあまりに哀れなくばみに身を潜め、戦闘に加入せざるを得なくなっていたから、もしかしたら聞き逃したのかも知れないと思いはしたが、途切れがちのTISは、彼の嫌な予感を肯定していた。

「くそっ！」

小さい罵りとともに、彼は40ミリ高射機関砲を敵に向けると、狙いもろくに定めず乱射した。オレンジの光を曳きながら飛び去っていた弾丸は、意外なほどの近距離で炸裂する。一瞬の閃光の中に、ミノタウロらしい影が浮かび上がった。

松崎はすぐに弾倉を交換する。すでにこれまでの戦闘で重火器の大半を失い、陣容は見る影もなく衰えた彼の小隊が持ちこたえることができているのは、既に壊滅した他の小隊から回収した弾薬で、いささかなりとも対応できていたことが大きかった。

だが、それも徐々に限界に近づこうとしている。

頼む、早くしてくれっ！

そんな松崎の願いが届いたのか、かなたからかすかにジェット特有の金属音が近づいてくる。なにしろ向こうの速度が速すぎるので、距離を置いて旋回してきたらしい。

『シルバーナイト、こちらナイトクロウ。これより攻撃を開始する。攻撃方法を指示されたい』

「こちらシルバーナイト。ナイトクロウ、一撃全弾で」

そこまで言いかけて、松崎は口ごもった。一瞬何かを考えた後に言い直す。

「いや、まずは通常爆弾を全弾投下、そののちの攻撃は別途指示する」

『了解。攻撃を開始する』

その声と同時に、金属音は急速に近づいてくる。聞こえているものかどうか怪しかったが、松崎は周囲に伏せるように言うと、自分も陣地の底にへばりついた。

やがて轟音は耳を聳するほどになり、直後、上空を2機のジェット機が通過していった。それから数秒して、地上で炎の花がいくつも発生する。

500ポンド高抵抗爆弾は、1発あたりの危害半径は半径30メートルほどにもなる。その中に巻き込まれれば、小型幻獣などひとたまりもなかった。

「いいぞ、ナイトクロウ、ブレイブ！ 次はロケット弾だ。先ほど着弾したあたりより、100メートルほど北側を叩いてくれ！」

『了解』

再び爆音が接近し、今度は陣地上空を飛び去る前に巨大な花火が飛び出すような音がかすかに聞こえた。

また爆発。今度ははるかに陣地に近かった。もしかしたらその一部は陣地そのものに着弾したかもしれないが、今はそんなことに構ってられない。

松崎は歓声を上げたが、同時に彼の脳内、その一部では、この程度の攻撃では敵の勢いを押しとどめることはできないであろうことも理解していた。

\*\*\*

それから10数分の間、瀬崎と高村は地上の指示に従い攻撃を繰

り返した。広域散布爆弾はさすがに1発ずつ投下し、必要ならば機銃掃射も行った。

一体何回の攻撃を行ったのか瀬崎たちにもよく分からなくなったころ、彼らの機体に残っている装備は、広域散布爆弾が2発ずつになっていた。機銃などとうの昔に空になっている。

そろそろ、カンバンだな。

「シルバーナイト、こちらナイトクロウ。当方残弾は高抵抗爆弾が2発ずつのみ。次の投弾で、必要なら再攻撃のため補給に向かいたい」

「ナ、ナイトクロウ。こちらシルバーナイト。その必要は……ない」

瀬崎は思わず眼を見開いた。シルバーナイト　松崎の声はそれほどまでに弱々しく、苦しげであった。

「お、おい！　シルバーナイト、どうした！？」

「敵の主力が……陣地に乱入した。こちらも精一杯抵抗はしたが……駄目だった」

「こちらスカイクッド21！　シルバーナイト、いま通信が入った。後退した部隊、ならびに民間人の脱出完了。第2陣を構築しつつあり、貴隊は直ちに後退せよ、だ！　もうそこで踏ん張らなくてもいいんだ、脱出しろ！」

「そつだ！　必要なら俺たちが援護してやる、早く！」

「もう、無駄ですよ」

戦場とは思えぬほどに冷静な、穏やかと喋っているほどの声に、瀬崎たちは思わず沈黙した。レシーバーの声は、だんだんと途切れがちになっていく。

「ここから、出ようにも、アシは全滅したし……。それに、俺以外に生存者は……反応なし、です」

「そんな……」

瀬崎は思わず絶句した。彼からは見えない光景であったが、松崎は陣地の底に倒れこみ、最後の力を振り絞って通信をしていた。大きく切り裂かれた腹からは多量の血が流れ出し、臓物がウォードレ

スによってかろうじて押さえられていた。彼の目の前には、最後まで一緒に戦っていた兵士の腕が転がっていた。

『俺も、出血がひどくて、もう眼が見えない……』

「莫迦野郎！ 最後まであきらめんじゃねえ！ そんなことを言っていると、ぶん殴るぞ！」

気がつけば、瀬崎はマイクに向かって絶叫していたが、松崎はあくまで冷静であった。

『できれば、そうされたいところなのですが……。腸がはみ出ちゃあ、もう、かないそうに、ありません。……ナイトクロウ、できればお願いがあるんですが……』

「なんだ！？ 言ってみろ！！」

『ここで、仲間たちの体を連中になぶられるのは、我慢……。できません。それに、最期くらいは……ちっと、派手な方が、いいですね……』

瀬崎の顔が激しく引きゆがむ。だが、何か言おうと開きかけた口から言葉が出ることはなかった。

『最後の、支援攻撃を要請します。攻撃地点は……青色信号弾発射地点。残弾全部をぶちこんでください』

戦場の只中に、再び青い星が打ちあがる。松崎が最後の力を振り絞って打ち上げたきらめきが夜空に輝いた。

「……こちらナイトクロウ、了解した。ゴツイやつをくれてやるから、よく見てろよ」

『了解……。支援、ありがとう、ござ……』

松崎の声は吸い込まれるように小さくなり、そして消えた。

「シルバーナイト！？ ……くっそおおっ！！」

瀬崎は怒りのままに投下ボタンを押し込んだ。ほぼ同時に高村の機体からも、広域散布爆弾が滑空を開始する。

4発の爆弾は、ゆらゆらと降下を続ける青い星の下をすり抜け、一定高度に到達したところで母体が分裂、中から数十発の小型爆弾を放出した。

半径数10メートルの爆煙が4つ、かつて学兵たちの陣地であったところを覆い尽くした。瀬崎は小さな声で地上を呼び出したが、やはり返事はなかった。

「……スカイキッド21、こちらナイトクロウ。支援攻撃終了、当方残弾なし。帰還する」

『こちらスカイキッド21、了解した。……お疲れ様でした』

瀬崎の頭に血が上る。彼は一瞬怒鳴りつけようとして、すんでのところで思いとどまった。スカイキッドもまた、自分と同じ感情を抱いているらしいことがその声から分かったからだ。

「どういたしまして。……スカイキッド21、そっちも大変だな」

『これが最初でもないし、おそらくこれが最後までもないが、やるしかないんだな、ナイトクロウ』

「そうだな、やるしかないんだ。スカイキッド。これより、帰還する」

『了解、ナイトクロウ。アウト』

『ナイトクロウ……』

入れ替わりに、高村の声が割り込んできた。

「なんだ？」

『僕たちは、やれるだけのことは、やっただすよね？』

「……もちろんだ、ブレイブ。まだこれから先がある、しゃきつとしろよ」

『了解』

2機の麗風は針路を北に向けると、爆音を残して戦場から飛び去っていった。

瀬崎が、自分が火葬にした学兵の名前すら知らなかったことに気がついたのは、少しあとのことだった。

（つづく）

## 第6話

1999年5月8日(土) 0500時

熊本市 戸島3丁目付近

陰鬱な夜が徐々になりを潜め、東の空が赤みを増していく。地表にはいまだ届かぬ曙光が、雲を茜色に染め始めていた。空は高い。いい朝だった。

地表のあちこちから立ちのぼる、幾筋もの煙が見えなければ、もしかしたらそれは真実と言ってもよかったかもしれないのだが。

「……え？ もう朝なの？」

ライトなしでも手元が見えるようになったことに気がつき、整備班副班長である森は、頭につけていたヘッドライトのスイッチを切りながら立ち上がった。朝特有の露を含んだ冷たい空気にわずかに体を震わせる。

どこからか、スズメの鳴き声が聞こえてきた。世界がこんなであっても、自然はその営みをそう簡単に変える気はないらしい。

「ん、んんっ……と。はああ……」

全身が弛緩していく、なんともいえない心地よさが体中をめぐっている。半ばしゃがみこんだ姿勢のまま作業を続けていたせいもあって、森の身体は相当に不平の軋みを上げていた。

「結局、寝そびれちゃったなあ……」

彼女は視線を上に移すと、小さく息をついた。そこには、5121小隊にとっての主力兵器である土魂号が3機、クラウチングスタートにも似た姿勢で待機していた。これらは敵の進行方向から見て反対側、戸島山の北西斜面のあたりに展開していた。

パイロットたちとの距離が多少あるのが不安要素ではあったが、まさかこいつらに山登りをさせるわけにはいかなかった。無駄な行

動は極力抑えなければならない。

3 機とも装甲はあちこち傷ついたりへこんだりして、見栄えはお世辞にもいいとはいえなかったが、それでも今のところ外から見た限りでは致命的な損傷をおっているようには見えなかった。一番気になる人工筋肉についても、昨日の約半日ほどはまったく活動していなかったこともあって、どうにか冷却に成功していた。

それに、いざとなれば多少はストックがないでもない。

士魂号の傍らには、一体どこから引つ張ってきたものか、肉屋のものとおぼしき冷凍トラックがへたり込むようにして停車していた。車両のほうはもう限界のようだが、これまたここに来るまでのあちこちで徴発してきたバッテリーで、どうにか冷凍庫のほうは稼働を続けている。弾薬もまだ多少は余裕があった。

小隊の戦闘力は、維持されているといってよかった。

問題は、このくらいじゃ戦況をひっくり返せそうにもない、ってことなのよね……。

一瞬、どうしようもないほどの無力感が背中を駆け抜けていき、森の身体に冷気とはまた違う震えが走り抜けていった。

それは、この撤退戦が始まって以来脳裏を離れることのない思いでもあった。彼女らは己の身体を敵弾にさらすわけではなかったが、それでも自己の全能力をかけて士魂号を整備し続けてきた。それは一定の効果も上げており、全員ではないにせよ、彼女らを生き残らせてきた原動力になったことは疑いない。

だが、敵の足はそれで鈍りはしたものの、決して止まることはなかった。熊本城攻防戦、八代平原遊撃戦と、幾度か人類Ⅱ幻獣間の戦力比を覆しかける勝利を手にしても、敵はその数倍の戦力を極めて短期間に投入してきたのだ。

正直、あれは反則よね。いくら戦っても追いつきやしない。そうこうしている間にも、周囲の部隊は次々と炎と爆煙の中に姿を消していった。最も行動を共にすることが多かった尚敬高校の部隊にしても、今では果たして生き残りがいるものかどうか、大変に



怪しいところであつた。

このままでは、いつか自分も死ぬ。

そう気づいたとき、森はよく自分が失禁しなかったものと羞恥とともに思い返すのだが、それは同時にまったくの真実といってよかった。歴戦の部隊であつても、いや、それだからこそいつかは敵弾の餌食になるのは避けられない事実であるのだ。

現に、数名の戦友たちが敵の手にかかり、この世ならざるところへ否応なく出撃していったのだ。次が自分の番でないとは誰も断言できないではないか。

そんなことを考えていたらいてもたつてもいられなくなり、森は休息時間を削つてまで整備に没頭していたのだが、その手を止めたとたんに再び考えが蘇つてきてしまった。

いつの間にか、森の足は細かく震えていた。ウオードレスを着用していてさえ、背中を嫌な汗が伝つていくような気さえした。

森は士魂号の傍らにしゃがみこむと、数分ほどそのままの姿勢で動こうとはしなかったが、やがて再びよろよろと起き上がった。額に浮かんだ汗をぬぐうと、腹の底から息を吐き出した。

ほんの少しだけ、気が楽になった。

だからこそ、自分はここにいるのだ。

ここならば、熊本市内ではほぼ確実な脱出地点ともいえる熊本空港からもほど近い。ここさえ守っていれば、脱出の足がかりである熊本空港は確保できるし、それは万一の場合でも、自分が脱出できる可能性が高いことを意味していた。そのために自分の能力が役に立つのなら、それこそ腕のふるい甲斐があるというものである。

森は、自分の思考が限りなくエゴイズムに凝り固まっていることを自覚していた。それに、実際には自分たちが脱出できる可能性など、限りなく低いであろうことを無意識のうちに理解していた。

だが、仮にそれが本当であつたとしても、希望がなければ自分は本当に壊れてしまう。たとえ話に聞いた蜘蛛の糸よりもか細い希望であつても、すぐるべきなものかが今の自分には必要であつた。

「……とにかく、今はこの子たちをなんとかしてあげないとね。ふふああ……。コーヒー、まだ残ってるかしら？」

神経が昂ぶっているせいか、眠気などかけらも感じなかったが、いささか喉に渴きを覚えていた。それに、この後のことを考えればうっかり眠り込むわけにもいかなかった。

実際に動き出してしまえば、それこそ眠るところの騒ぎではないであろうが、とにかくコーヒーでも飲めれば、何かしらの気分転換にはなるだろう。それが今の森には一番必要なものに感じられた。

\*\*\*

「あら？ 森さん、早いわね」

「あ、先輩。おはようございます」

坂道を登って「司令部」まで来てみると、原が屋外にセットされたテーブルでなにやら書類に書き付けていた。傍らに置かれたカップからは、深みのある香りが漂い出て森の鼻をくすぐっていく。

「起床まではまだ時間があるけど……。あなた、寝てないの？」

「い、いえ、そんなことはないす。少しは寝ました」

「ふうん……。まあいいわ。あなたも飲む？」

「はいっ！」

元気のいい声に苦笑しつつ、原は傍らのコンロにかかっていたポットを取り上げると、森が差し出したカップにコーヒーを注いでやった。

「砂糖もミルクもないから、ブラックしかできないけど……」

「いえ、いただきますっ」

コーヒーは火傷しそうに熱く、しかも合成特有のいささか深みのない味がしたが、今は温かい飲み物が飲めるというだけでも大ご馳走のように感じられた。

「あ、あちちっ……。ふう、生き返ったす……」

ようやく人心地がつくと、周囲に気を配る余裕が生まれてきた。

あたりには原以外に人影はない。歩哨のメンバーは夜通し警戒に当たっていたはずだが、今は姿は見えなかった。

「それにしても、整備班まで全員休憩が取れたなんて、珍しいですね」

「まあ、ほとんどの整備は昨日のうちに終わってたし、これから先、休めるかどうかも分からないからね。体力を回復できるうちにしておこうつて善行　いや、司令の判断よ」

「ふうん……」

それはその通りかもしれない。珍しくも夕べから今朝にかけては敵の動きもなく、ときおり上空を通過していく脱出機のほかは、彼女らの休息を妨げるものはいなかったのだから、こんなチャンスが無にするべきではなかった。

やはり、少しでも寝ておくべきだったかなあ？

「そういえば先輩、さっきから何を書いてるんですか？」

心中に沸き起こりかけたかすかな後悔を無理やり追い出すと、森はことさら元気そうな声をあげた。

「部隊の燃料・弾薬の残存量を計算してたの。どう節約しても、あと2〜3回の戦闘が限度ね。……土魂号の方は？」

「人工筋肉の交換分が、あと1回こつきり、それでおしまいです。アビオニクスはストックが切れちゃいましたから、今度故障が発生したら……」

「土魂号もただの人形、つてわけね……」

原は手元の資料を見つめながら、なにやら思案顔を浮かべていた。どことなくよからぬ雰囲気を感じた森が話しかけようとしたが、その前に原は顔を上げると、ずっと森に視線を合わせた。

「あ……」

「今日を入れてあと2日。せめてこの間だけはなんとかここを死守しなければ、脱出もおぼつかなくなるわ。そのために今は、何が何でも戦力を維持させないと……。いいわね？」

「は、はいっ」

「アビオニクスについてはあまり気にしなくてもいいわ。いざとなれば各部の神経系をパイロットと直結することにしましょう。彼らの負担は増すけれど、動けなくなるよりは……」

そのとき、甲高い金属音とともに、中型の輸送機らしきものが森たちの上空を通過していった。

「また来たわね」

「だんだん、ペースが上がってるみたいですね？」

「ピークタイムが、今日あたりに合わせてあるのかも知れないわね」この手の作業には、ピークタイムというものがもつけられることが多い。だんだんと作業自体に慣れてきて、何もかもが順調に進むようになる時間のことをいうのだが、この間にできるだけの人間を運び出してしまおう、というわけである。

「さて、そろそろみんなも起きてくる頃ね。士魂号の様子でも……」

そこまで原が言いかけたとき、輸送機が飛び去った方角から、なにやら鈍い、くぐもった音が聞こえてきた。

「先輩、今の音は……」

「エンジン音にしては変ね？ ……えっ!？」

原が驚きの声を上げるとほぼ同時に、それまで順調に聞こえていたエンジン音が急激に甲高く、耳障りなものになっていった。明らかに出力を上げているのだ。

その音がやや遠ざかったかと思うと、少しして鈍い地鳴りのような音と、後は聞き間違えようもない爆発音があたりにとどろいた。

「……!」

森は、一瞬頭の中が空白になり、何も考えられなかった。いや、脳の別の部分はすでに答えを出していたのだが、感情がそれを理解することを拒否していたのだ。

「……落ちたわね。でも、なんで？」

容赦のない原の疑問に対し、答えはすぐに出た。空港の方からくぐもった射撃音が連続して聞こえ、それにかぶさるように新たな爆発音がいくつも轟いたのだ。

それは、決して聞こえてはならないはずの音であった。

異変を察知したのか、あちこちのテントから小隊メンバーが飛び出してくる。気の早いものは次々と持ち場へと向かっていた。

「こうしちやいられないわね。森さん、念のために士魂号の起動準備……森さん？」

いつもなら間髪いれずに返ってくる返事が聞こえないことに不信を覚え、原は後ろを振り返り　目を見開いた。森はその場にたつたまま目を大きく見開き、あらぬ方を見つめながら小刻みに震えているではないか。

「あ……、ああ……」

「森さん、どうしたの？　しっかりしなさい。森さん！」

「あ……」

森の手からカップがこぼれ落ち、コーヒーをあたりにぶちまけた。異変を察知したのか、衛生官である萌が救急箱を手にもちらへと駆け寄ってくる。

これでもう、逃げられない。

先ほどから森の脳内では、その言葉がぐるぐると渦を巻いて回り続けていた。もしかしたら、と覚悟をしながらも信じていた希望が、目の前で打ち砕かれたのだ。

少なくとも森にはそう感じられた。

『森さんっ！』

原が呼び掛ける声も、ひどく遠い。森は、急に股間の辺りが生暖かくなり、それが広がっていくのをぼんやりと自覚していた。

だが、彼女はひとつ間違っていた。

結果的に言えば、森の希望はいまだ失われてはいなかったのだ。それを後に彼女は知ることになる。

むしろ、希望を砕かれたのは、すでに蜘蛛の糸に手をかけていたはずのひとびとであった。

（つづく）

## 第7話

疲労を友として過ごしていたのは、なにもひとり5121小隊のみではなかった。ここ熊本空港においても、その理由は様々ながら、多くの者がついに眠ることなく夜をすごしていたのだ。

ようやくここにたどり着いた避難民、彼らを送り出すべく奮闘する航空関係者たち、管制塔から少し離れた航空自衛軍の格納庫でも、それはまた同じであった。

夜半に始まった航空支援のため、整備士たちは瀬崎たちが帰還してきた後、すぐさま再出撃に備えて準備を整え、そして瀬崎たちパイロットは、飛び込んできた支援要請に繰り返し飛び出していった。そんなわけで整備士たちはろくに休むこともできなかったのだが、それについて文句を言う者はいなかった。

ただ、どうしようもないほどの疲労が全身にのしかかっているのも確かで、夜間出撃も終了し、今朝の出撃の準備もようやく整ったわずかな隙を狙い、整備士たちは格納庫のすみに固まるようにして毛布をかぶってわずかな睡眠を貪っていた。

ちなみに瀬崎たちは、最後の出撃から戻ってくるなりその場に崩れ落ちると、ふたりとも大いびきをかいていた。今頃はまだ宿舎で眠りこけている頃合いであろう。

彼らは、それに値するだけのことは成し遂げていた。

「すっかり夜が明けちゃったな」

田中はあたりを見回し、整備士たちに視線を向けると小さく苦笑した。いつもだったらこんな格好で寝ていたら蹴っ飛ばして叩き起こすところであったが、今は事情が事情である。

彼は近くのテーブルにあったポットを引き寄せると、カップにコーヒーを注ぎ込み、ひと息に飲み干した。コーヒーはすっかりぬるくなっていた。

「……俺あ、どっちかってえと茶のほうがいいんだがなあ」

「贅沢言わないでくださいよ、おやつさん」

やたらと母音が強調された、だが流暢な日本語だった。田中が振り返ると、そこには彫りの深い、北欧系の顔立ちをした金髪の青年が立っていた。

「おう、ハンス。もう起きたのか？」

「まだ若いですからね、一休みすりゃ十分ですよ……ふ、ふああ」  
遠慮会釈ない大あくびに、田中の苦笑が大きくなった。

「なにが十分だか。……まあいい、こっち来て座れや」

「それじゃ遠慮なく。ついでにコーヒーももらえませんか？」  
「ほらよ」

田中は手近にあったカップにコーヒーを注ぐと、ハンスの方へと押しやった。彼はそれを受け取ると、少しずつありがたそうに飲んだ。

ハンスはシユミット技術少尉。れっきとした航空自衛軍士官で熊本航空隊整備主任でもあるが、彼の経歴は見るものが見れば驚きに目を見張り、あるいは眉をひそめ、予備調査の開始を指示するかもしれない。

彼は、ドイツ生まれのドイツ育ち、生粋のドイツ人であった。といっても、向こうの記憶など、すでにはるか彼方に積み重ねられ、埋もれてしまっていたのだが。

国ごと幻獣共生派に寝返り、他の人類領域に対して公然と反旗を翻したせいで、もともと海外在住だったり、脱出してきたドイツ人たちの人類領域における社会的地位は、大変に低いものとなっていた。

そんななかで例外的に軍隊においては、出身よりもどちらかといえば能力が優先される。そうであるがゆえに、そしてどうしようもないほどの人手不足という現実の前にハンスの入隊は認められたわけであるが、同時に思想的チェックは大変に厳しいものであった。

ハンスが士官に至るまでには、それこそ並々ならぬ努力が必要であったに違いないが、人懐こささえ感じさせる彼の笑顔は、そんな

ものをみじんも感じさせなかった。

「なんだ、しみつたれた飲み方だな」

「だっておやっさん、こいつはようやく手に入った本物のコーヒーなんですよ？ もうちょっと味わって飲んでくださいよ」

「ンなまどろっこしいことができるか。おい、それより茶はねえのか？」

「残念ですけど」

「フン」

田中は大きく鼻を鳴らしてみせた。ハンスはお構いなしにあくびを連発する。ほわほわと目に涙を浮かべながらどうにかそれを納めると、なにげなさそうにつぶやいた。

「それにしても瀬崎さんたち、どうしちゃったんでしょかね？」

彼の言葉は、昨日瀬崎たちが帰ってきた時、えらく不機嫌そうだったことを指していた。田中は椅子に背中を預けながら天を睨み、面白くもなさそうにまた鼻を鳴らした。

「さあな、虫の居所が悪いんだろ」

分かっているくせにという口調に、ハンスは軽く肩をすくめてみせた。彼とて一般情報のあれこれに目は通しているから、言ってみればそれはハンスなりの確認に過ぎなかった。

田中の洪面がわずかに強くなったが、やがてほっと息をつくと表情を和らげた。ハンスもそれに合わせたものか、椅子に深く腰掛けなおす。

「ぬかりはねえな？」

「はい。各機の出撃準備は完了しています。第2中隊の出撃は約1時間後。対地支援攻撃です」

たった3機で中隊なあ、寂しくなったもんだな。

普段はめったなことでは感情を露にしない彼にしても、ここしばらくの熊本航空隊の損害には衝撃を感じざるをえなかった。

先にも述べたとおり、ここにはかつて40機以上の機体が翼を休めていたのだ。それが、増援を加えてさえこれでは、看板のみの航



空隊となる日もそう遠い先のことではなかった。

長いことはもたねえだろうとは思ったが、ここまでとはな…。

むろん、田中たちは整備に一切の手を抜く事なく粉骨碎身、1機でも多く出撃が可能なように、全力が発揮できるように努力し続けてきた。それでもなお、敵の物量は彼らの努力をすべて飲み込み続けてきたのだ。

「ま、やるしかねえよな」

「ええ」

しばしの沈黙が訪れた。

と、不意に田中が立ち上がる。

「おやつさん、どちらへ？」

「我らが大将の様子でも見てくらあ。ああそうだ、あと20分もしたら総員起こしをかける。奴らにはまた働いてもらわにゃならん」

「ヤヴォール、ヘル・コマンド」

ドイツ語での返答を背に受けながら、田中は一路管制塔へと急いだ。

熊本空港はもとも民間専用空港である。だが、海外の戦況が伝えられるにつれ、幻獣による九州への侵攻は確実と判断した政府は、戦力増強の一環として九州の他の民間飛行場と同様、半ば強引な軍用空港としての拡張工事を実施していた。

とはいえ、元が元だけに、ターミナルはどこかのどかな印象を残している。田中は一瞬だけそちらに視線を走らせた後、紙袋を片手に管制塔脇に増設された無粋な建物に入ってしまった。

あちこち照明が切れている薄暗い廊下を通り抜けると、多少人の気配がし始めた。そこかしこの部屋ではスタッフが忙しく立ち働き、ときおり航空管制らしいやり取りすら聞こえてくる。

正直、熊本空港の限界に挑戦するような航空機の離着陸をさばく

ためには、元からある施設だけでは到底手が足りなかったのだ。

ときおり廊下を駆け抜けていくスタッフに道を譲りつつ、田中は一番奥まった一室の前に立つと、軽くノックをした。

返事はなかったが、彼はお構いなしにドアを開ける。

「ちよいと邪魔するぜ……っと」

田中の足が思わず止まった。次の一步をどこに降ろしたらいいものか、とつさに判断がつかかねたのである。

「ああ、おやつさん。御苦労さんです」

奥の机から、不精髭にまみれた男が啜え煙草のまま声をかけた。もとはきちんと整えられていた頭も手入れする間もないのかいい加減なものであった。

熊本航空隊司令・後藤大佐の惨状に、田中は思わず苦笑を浮かべた。

「こいつあ、また……。爆撃でも食らったかね？」

「似たようなものかもしれませぬ。ま、適当なところに座ってください」

「適当なところって言ったって……。んじゃ、失礼」

足先で適当に書類をかき分けると、田中は様々なもので占領されていたソファから適当に物をどけ、ようやくのことで腰を下ろした。

下ろしたとたん、ソファの柔らかさに疲れまでもがずん、とのしかかってくるような気がした。田中はサングラスを外して目許を強く押し込んだ。

「コーヒーでもいかがですか？」

「いや、さっき飲んできた。それより茶はねえか」

「残念ですが」

田中は大きく息をつく、後藤に視線を戻した。

「お前さん、飯はちゃんと食ってんのか？」

後藤はげっそりと頬がこけ、目許にははつきりとくまが浮かんでいる。顔色も決して良いとは言えなかった。

「ええ、一応は。最後に食ったのは、確か……いつでしたかね？」  
「おいおい、ボケたことを言わんでくれよ。あんたに倒れられたんじゃない、ここがたちゆかねえ……ほらよ」

田中は無造作に手にした紙袋を放り投げた。後藤が受け取って中を見ると、いわゆる栄養食と小さなチョコレートが入っていた。

「こんなもんしかなくて、すまねえけどな」

「いえ、ありがたく頂戴します」

後藤は紙袋を捧げもつようにして見せると、中からチョコを取り出し、口にほうり込んだ。強い甘みとカカオの香り、それに苦みが口中に広がり、染み渡っていくようである。それで初めて後藤は、自分の身体がいかに栄養を欲していたかを理解した。

「ったく、仕事熱心もほどにしてくれよ」

自分のことは棚に上げた田中の言葉には、後藤も苦笑を浮かべるしかなかった。コーヒを飲んで口を整えると、後藤は本題を口にした。

「航空隊の様子はとうですか？」

「パイロットは意気軒昂、整備士たちは疲れちゃいるが仕事はできる。だが……」

「補給ですか？」

田中は黙ったままうなずいた。

戦況ここに至り、陸路による補給など望むだけ無駄であった。

となれば空路しかないわけだが、今ここにやってくる航空機はまず避難民を脱出させることが主目的であり、それ以外の時間は可能な限り削る必要がある。

結果、スケジュールの合間にねじ込むようにわずかに飛ばすことができた貨物専用機以外は、手で運び出しができるような軽量物に限られていた。

「機体そのものはともかく、連続出撃が響いてるな。アビオニクスはおそらく、全部遠からずにスクラップだ」

「今朝一番で到着予定の機が、少し部品を運んでくる予定です。後

は午後上空自の輸送機が来ます」

「増援は？」

「海自の機動部隊がエアカバーに入るそうです。あとは……」

「望み薄、か」

それは田中にも予想できた。もともと空自は開戦時から戦力温存策に走ることが多かったが、それはいまだに健在であるという訳だ。「取られちまう予定のところにや戦力は割けんってか。2000機以上保有してるくせにケツの穴の小さいこった」

最近は、少しずつ変わってるみたいですがね。

後藤は口の中でだけ返事を返す。それは事実ではあるが、現状の改善には役立たなかった。

「ま、こんなことを言っても仕方がねえか。熊本航空隊可動11機、最後までしっかり面倒を見てやるさ」

一体、何機がこの地を無事にはなれることができるかは分からないが、それでも田中たちは最後の1機になるそのときまで手を休めることはないであろう。

それが分かっただけでも、今後の後藤にはどんな援軍よりもありがたかった。

そのとき、ジェット特有の金属音が低く、遠く響いてきた。音がらするに民間の旅客機らしい。

「おつといけねえ、もうこんな時間か。それじゃあな」

「はい、ご苦労さまで」

言いかけた後藤が、ふっと体をこわばらせた。何事かと振り返った田中もすぐに同じ状態になる。彼らの耳は2種類のジェット音をとらえていた。複数機が同時に着陸できるほど、熊本空港は大きくない。

となれば

彼らの思考がまとまる前に、民間機のジェット音が急激に強くなった。明らかに異常事態だ。

「！」

田中が近くの窓から外を見ると、後方に煙と、はつきりとした火炎をたなびかせながら急激に傾いた日本航空の中型ジェットが向ここの丘陵地帯へと高度を下げていき、やがて巨大な爆煙を発生させた。

建物すら揺さぶる衝撃波の中、複数のジェット音とローター音、それに低く身体の中から揺さぶられるようなサイレンが鳴り響いていた。

空襲警報だ。

「おやつさん、整備班緊急態勢！」

「了解！ 上げられる奴は全部出すぞ、いいな！」

「任せます！」

「くそっ！ 連中め、とうとうこんなとこまで来やがった！」

階段を駆け降りながら、田中は憎々しげにつぶやいた。その間にも空襲警報はうなり続け、それにかぶさるようにジェット音やローター音、それに射撃音が鳴り響いていた。

外に出て見ると、基地防空隊の高射機関砲が幾筋もの火線を上空に向けて打ち上げている。上空を乱舞する機体から何か黒い粒が離れたかと思うと、空港からだいぶ離れたところで火柱を立てる。

「下手くそめ」

田中は思わず毒づいたが、次は当然修正してくるだろう。いつまでも相手の技量に頼っているわけにはいかなかった。

彼方からハンスがこちらに向かって駆けてくる。ハンガーの方では機体が次々に引き出され、オレンジ色のパイロットスーツに身を包んだ人影が走っていくのが見えた。

彼らは各自の及ぶ限りの速度で迎撃準備を整えつつあったが、それでも現状を乗り切れるかどうかについて確かな解答を出せる者はいなかった。

（つづく）

## 第8話

田中は簡単に降参するつもりなどなかったが、事態は彼の想像をさらに超えたスピードで推移していた。

「おやつさん！」

ハンスの叫びとほぼ同時に、重々しいローター音が背後から覆いかぶさるように迫ってくる。田中が振り向くと、いつの間に忍び寄ったものか、1機のきたかぜゾンビが20ミリガトリングガンを旋回させ、田中たちに狙いを付けているではないか。

「！」

考えるよりも早く、田中は横っ跳びに身を踊らせた。わずかな時間において猛烈な射撃音とともに、きたかぜゾンビの20ミリ弾が傍らをかすめていった。

「ぐっ！」

衝撃波が田中の体を揺らす。滑走路のコンクリートが徹甲弾を跳ね返しつつ、不気味な音と共に細かい破片をあたりに撒き散らした。装甲車の上面装甲なら貫徹するほどの20ミリ高速徹甲弾は、生身なら近くを通っただけでも肉を裂きかねない。彼はよろめきながらその場に倒れ込んだ。

その時、きたかぜゾンビのはるか彼方、地面の一角で何かが光ったかと思うと、轟音とともに盛大な白煙を引きながら、鋼鉄の矢がまっすぐに向かってきた。

それに気づいたか、きたかぜゾンビはヘリコプターとは思えない急旋回で回避を試みたが、それは一瞬遅かったようだ。

鋼鉄の矢 誰かが発射した携帯型地对空ミサイルは、きたかぜゾンビの右斜め後方から機体中央部に命中、半ば突き抜けかけたところで信管を作動させた。空中に紅蓮の炎の玉が発生し、きたかぜゾンビはばらばらに引き裂かれながら滑走路に叩きつけられ、さら

に巨大な火柱を発生させる。

「おやつさん！ おやつさん、大丈夫ですか！？」

爆発の衝撃波によるけながらも、ハンスは必死で田中を抱き起す。田中は一瞬だけうめき声を上げた後で、にやりと苦笑を浮かべた。

「心配ねえ、とりあえず身体は動く。……おい、何をぐずぐずしている！ 俺のことなんぞ構ってねえで、さっさと機体を引きずり出せ！」

「は、はいっ！」

ハンスが走り去ったあとも、空港内には不気味なサイレンが遠く近くと繰り返しながら流れている。それに混じっていくつものローター音と、遠くからはジェット特有のエンジン音が聞こえてきていた。滑走路端のほうでは機関砲の発射音が断続的にこだまし、同時に射線がひどくゆつくりと空へ伸びていった。

畜生、こいつあ今日はとんでもないことになるぞ。

だが、心中とは裏腹に、田中は口元に不敵な笑みをたたえるところと立ち上がり、嫌になるほど丁寧に身体の埃を払った。

そのころになり、ようやくのことで携帯型対空ミサイルや機関銃を持ち出してやってきた整備士たちが駆けつける。向こうでは別の一隊が航空機に取り付いて、一刻も早く出撃させようとおおわらわになっていた。パイロットたちはどうにか乗り込むことに成功したようだ。

ぱつと見ただけでも何名か少ないように田中には思われたが、それは後のことだ。

「よおし、揃ったな？ ぐずぐずしてる暇はねえ。お前たち、あいつらを全力で援護しろ！」

『はいっ！』

「ハンス、こっちはお前に任せる。無茶はさせんじゃねえぞ」

「分かってます！」

それだけ言い残すと、田中は年齢に似合わぬ勢いで駆け出した。

彼の向かう先では2機の麗風が、今まさに発進準備を完成させようとしていた。周囲の整備士たちは汗みずくになってミサイルを翼下のウエポンベイに装着しようとしている。エンジン始動用のコンプレッサーがあわただしく接続された。

その様子を、コックピットから瀬崎がじりじりとした様子で覗いている。彼方から先に準備の整ったらしい機体が、ジェット特有の金属音を後方に残しすると動き出した。

「時間がねえ！ ミサイルは最低限でいい。ガトリングの弾は補充してあるか？」

「大丈夫です！」

「よし、それならもう十分だ。出るぞ！」

「レイ！」

田中が大音声に呼ばわると、瀬崎は今初めて気がついたのか、驚いたような表情を浮かべた。

「おやっさん、大丈夫ですか！？ なんだかターミナルの方でも襲撃があつたらしいけど……」

「心配すんな、ここですこしてピンピンしてらあ。遠慮なく行つて来い！」

「了解！」

瀬崎は親指を立てると、にっと笑みを浮かべた。同時にコンプレッサーの回転音が急激に高まっていく。

「コンタクト！」

合図と同時に、エンジンに火が入った。ロシア生まれの鶴に今再び命が吹き込まれたのだ。

「コンプレッサー外せ！ 総員退避！」

「こちら204号機、エンジンがかからん！ 始動を断念する！」

「早く、シエルターに！」

『空襲、空襲！ 総員対空防御、繰り返す、総員対空防御……』

「遅いんだよ、莫迦野郎！」

喧騒と混乱が交錯する中、2機の麗風はむしろ優雅な動きで滑走



路に滑り出た。一足先に出た台湾空軍のF-16が、アフターバーナーを全開にして滑走路を走り出し、後方から敵のジェット機、寄生型幻獣ファントム・ファイターが放った生体ミサイルの一撃を食らい、滑走路上に部品をばら撒きながら散華した。

「くそっ！」

瀬崎たちはスロットルを全開にして、しゃにむに滑走路を突っ走る。いかに強力な戦闘機といえど、離陸中はひどく無防備である。しかも敵に頭を抑えられている状況では無謀以外の何者でもない。だが、彼らにはいまだいくばくかの幸運がついていたようである。派手に燃え盛る友軍機の傍らを駆け抜け、翼が風を掴んだと見るや、瀬崎は一気に急上昇に入った。ともかく敵より上位を掴むのが先決である。

彼らを追いかけするように、ファントム・ファイターの漆黒の機体が後を追いかけていった。

空港上空に敵機の侵入を許したのは明らかに防空担当のミスであったが、彼らだけを責めるのは一概に正しいとは言えなかった。

早期警戒網というのは多数のレーダーサイトや哨戒機などで濃密な搜索網をくみ上げ、その中でいち早く敵機を発見するというのが本来の姿であり、今の熊本空港にはそのどれもが存在しなかった。先にも述べたとおり、かろうじて九州や四国から飛来している哨戒機、それに生徒会連合の指揮管制機である「マザーバード」も、今や唯一の航空拠点となった熊本空港を重視し情報を送ってきてくれているが、全てのエリアをカバーできるわけではない。

ましてや、ファントム・ファイターはさておき、きたかぜゾンビのような比較的低速目標が地上すれすれの高度を飛行したりすれば、よほどのルックダウン能力（眼下搜索能力、とでもいうべきか）を持つている機体でも補足するのは至難の業である。

だから、現状においてはある意味仕方がないが、同時にそれを免罪符にするわけにもいかない。

空港に配備されていた防空隊は、その全力をもって迎撃を開始した。

滑走路周辺に展開していた自走式の対空ミサイルランチャーは比較的距離のあるファントム・ファイターに狙いを定め、その鎌首をゆつくりともたげたかと思うと、76式短距離多目的誘導弾を続けざまに撃ち放った。

誘導方式こそ比較的簡素な赤外線誘導方式だが、一部を除いて幻獣はジャミングという手段をあまりとらない。ファントム・ファイターはその数少ない例外のひとつであったが、彼らが何らかの手段を取る前に、誘導弾は狙い過たず目標を捕えた。

空中に炎の華が咲く中を、空港周辺に配置された対空機関砲はともかく目についた敵に向け、片端から機関砲弾をたたきつける。その他、おおよそ手の空いている者は、それこそ整備士やコックにいたるまでが、あらかじめ用意していた対空兵器を手に戦闘へと加入していったのだ。

だが、既に本陣まで敵に切り込まれたという不利は覆しようもなく、数機のきたかぜゾンビが防空網をすり抜けた。田中たちに物騒な挨拶をしたのもその1機だったのだが、もう1機が空港ターミナル付近にゆつくりと接近していく。

やがて、きたかぜゾンビの両脇に盛大な白煙が立ち上ったかと思うと、炎の尾を引きながらロケット弾が空港ターミナルロビーへと伸びていった。ほぼ同時に機首からは20ミリ弾がばら撒かれる。

きたかぜゾンビは、持てる装備の全てをもって無差別攻撃を行ったのだ。

先に述べたとおり、空港周辺には市内の戦火を逃れ、脱出の順番を待つ市民が多数待機していたのだが、きたかぜゾンビの攻撃は、まさにその中心に着弾した。

窓ガラスが粉々に吹き飛ばされ、連続して発生した火球に市民たちが次々と飲み込まれていく。悲鳴と怒号が立ち上り、やがて20ミリ弾が雨あられと降り注がれると、それは人間が発しているとは

思われない絶叫へと変わっていた。

攻撃は、時間にして数十秒もなかったであろうが、きたかぜゾンビが攻撃を終えて反転しようとし、後先構わぬ対空機関砲の射撃で蜂の巣にされた頃には、数百を超える市民が血だまりの中でのた打ち回っていた。

「痛い、痛い……」

「畜生、俺の、お、俺の脚が……」

「うちの子、うちの子の身体、どこいつちゃったのよ……」

うめきと絶叫、肉片と臓物が散らばる中に、煙を噴き上げながらきたかぜゾンビがゆっくりと高度を下げていく。

防空班が気がついたときにはすでに遅く、きたかぜゾンビは墜落寸前に持てる弾薬を全て撃ち放すと、自らも盛大な爆発を引き起こし、ターミナルを焼き尽くした。

それでも、防空隊の手が緩められることはない。

戦争に、聖域は存在しないのだ。

(つづく)

## 第9話

1999年5月8日(土) 0640時

熊本市 戸島3丁目付近

さわやかな朝の空気の中、5121小隊に緊張が走った。

最初の墜落音の後に複数のローター音がかぶさるように響き渡る。そして紛れもない銃撃音。

何が起きているのか、もう間違いなかった。

「敵襲っ！」

原は一瞬だけ傍らに視線を走らせる。森はその場にうずくまったまま、身体を震わせ続けていた。

無駄を悟ると、大音声で周囲に呼ばわった。それとほぼ同時にテントから次々に小隊メンバーが飛び出してくる。

「状況は？」

傍らの指揮用テントから、善行はむしろゆったりとした足取りでやってきた。原は黙って首を振る。

「空港方面で爆発音がひとつ、あとは銃撃音が1ダースほど。音からして空港の防空隊も含まれてるわね」

即席で編成された部隊とはいえ、2ヶ月も戦闘を行っていれば自然と鍛えられることもある。射撃音で敵味方の区別をつけるというのもそのひとつである。

大半の幻獣はともかく、寄生型幻獣については寄生ゆえの影響が微妙に「生前」と射撃音が違ってくるものである。その微妙な違いを聞き分けることは、生き残るためのコツであるといってよかった。だが、仕方のないこととはいえ、情報としては十分ではない。

そのとき、無線機から速水の声が流れ出した。

『こちら速水。熊本空港方面に敵影多数。現在まで確認せる敵、きたかぜゾンビが8ないし10、空港に向けて攻撃中！ そのほかフ

アントム・ファイターらしき機影4を認む!』

彼の声にもかすかに緊張が混じっていた。

無理もない、と善行は思う。ファントム・ファイターは彼らにとっても危険極まりない敵である。5121小隊はかつて、ファントム・ファイターと直接刃を交えたこともある。いずれにしても油断していい敵ではなかった。

もっともそれは、きたかぜゾンビにしても同様である。むしろしつつさと厄介さではこちらの方が上かもしれぬ。

戦車隊にとって最大の天敵はヘリコプター。これは、当分の間変わることはない定石なのだから。

「地上に動きはありますか？」

『ここからでは良く見えませんが、少なくとも空港周辺には見当たりません。今舞が2号観測拠点まで前進、情報収集にあたっています。もうすぐ報告があると』

『舞だ』

舞の声が交信に割り込んできた。気のせいか、背後のノイズの中に砲爆撃音が混ざっているような気がする。

『現在観測拠点2号まで進出。きたかぜゾンビは14に増加。現在熊本空港に対し断続的に攻撃を継続中。ターミナルから黒煙が立ち上っている。攻撃を受けたらしい』

聞いただけでも空港の苦境は理解できた。舞の報告はなおも続く。『空港防空隊も反撃を開始。きたかぜゾンビ2機の墜落を確認した。』

……今、熊本航空隊らしき機体が出撃した』

周囲で準備を進めていた隊員たちの間から、ほう、という息が漏れた。

報告では、早くも1機が地上で撃破されたことは伝えられていない。さすがの舞も、滑走路端で燃え続ける物体をにわかには見極めがたかったものと見える。

さらに後続の機体が順次離陸した報告が入ると、あたりの空気がやや緩んだ。機数は少なくとも、熊本航空隊は一騎当千の強者揃い

というのが通り相場である。もしかしたら、これで。

残念ながら、現実はその甘くはなかった。レシーバーから舞の切迫した声が響いてきたのは、まさにそんな時であったのだ。

『きたかぜゾンビが数機、進路を変更した！ 後続の増援と共に、周辺部へ展開する模様！』

だとすれば、幻獣の指揮官 もしそんなものがいたとしての話だが は、まずこの作戦の中枢を叩いてから周辺に戦果を拡大するつもりということになる。

戦いにおいて、指揮系統の崩壊は多少の戦力差どころではないくらの恐るべき効果をもたらす。敵はそれを十分認識しているのだ。かつて幾多の戦いで証明され、今また繰り返されようとしている戦法に、新たな事実が付け加わった。

『きたかぜゾンビが3機、こちらに機首を向けた！ 急速接近中！』

「直ちに回避！ 合流しなさい！」

『了解……敵、ロケット弾を発射した！』

『舞っ……！』

速水の叫びとほぼ同時に、耳を聳するほどの轟音がわずかな時間差をおいてあたりに響き渡った。

まず頭を潰したあとに、周辺に戦果を拡大する。ならば、その時に攻撃するのはどこか？

周辺に対し防御効果が高く、陣地として活用できそうな場所つまり、戸島山周辺がまず目につくのは、ある意味当然であった。

熊本空港南部から侵入を果たしたきたかぜゾンビの数機は、地上からの対空砲火により2機を失いつつも、なお5機が第1次攻撃を実施することに成功していた。この攻撃により、滑走路の一部が被弾し、わずかな時間ではあるが滑走路のうちの1本が離発着ができなくなってしまった。

なおも打ち上げてくる機関砲弾や対空ミサイルをかわしつつ、第2次攻撃を実施しようとしたきたかぜゾンビのうち、3機が何者か

らか指示でも受けたのか、機首を南西に翻した。

正面にはこんもりと緑に包まれた小山がある。きたかぜゾンビは各種センサー類を最大限に働かせ、小山の一角にテントらしきものが張られているのを発見した。

さらに機載カメラをめぐらせば、山すそに　ほとんど見分けがつかなかったが　「敵」の人型戦車らしき姿が映っているではないか。

きたかぜゾンビは、もともとの持ち主が使用していたライブラリと照合し、それが彼らにとっての最重要攻撃目標であることを理解した。

急激に速度を上げつつ接近する中、さらにいくつかの小反応を確認したきたかぜゾンビは、そのうちのひとつに対して躊躇なく攻撃を開始した。

「ちっ！」

舞は激しく舌打ちすると、無線機を片手に掴んだまま岩場から飛び降りた。ロケット弾は白い航跡を引きながら、いく筋もこちらに向かつて飛んでくる。命中すればもちろんのこと、爆発に巻き込まれれば痛いどころですむものではない。

ウオードレスが嫌な軋みを上げる。もともと活動限界はるかに超えているのを、部分的な補給と調整だけでだましだまし使用しているのだ。

急激な機動はすでに禁止事項となっていたが、今はそんなことは言っていられない。舞は倍力装置を最大限にセットすると、森に向かって駆け出した。

だが、次の瞬間には、右足から何か濡れた物が千切れるような音がし、その場にくぐりと膝をついてしまう。

人工筋肉が荷重に耐え切れず、破断したのだ。

「！」

思わぬ衝撃に彼女が振り返ると、ロケット弾の弾着はほぼ同時

だった。

最初の一撃は、舞がつい先ほどまで立っていた岩場に命中。巨岩を砕き、無数の破片を周囲に撒き散らした。破片は十分に距離をとることができなかった舞の周囲にも降り注ぎ、そのうちのひとつ、拳ふたつ分はあるつかというつぶてが唸りを上げて舞の左肩口を直撃した。

「うぐっ……！」

いくらウオードレスを着用しているとはいえ、衝撃までも吸収できるものではない。派手に拳で撫でられたがごとく、舞の身体は森に向かって弾き飛ばされた。

「う、くっ……」

息がつまり、身動きもならぬ。右足は相変わらずまったく力が入らなかった。こうなってしまうとウオードレスは鎧というよりは単なる足かせでしかない。

そうこうしている間に、他のロケット弾も次々に弾着、当たるを幸いに周囲のものを全て薙ぎ倒していく。強烈な爆圧が舞を揺さぶり、弄ぶ。とつさに耳を押さえ、口を開けていなければ、気圧差で鼓膜が破けるか、肺胞が破裂していたであろう。

おかげで身体は守られた。

だが同時に、それは最も重要な情報を聞き逃すもとでもあったのだ。

爆発が収まり、硝煙たちこめる中、ともかく身を隠そうと身体を起こした舞が聞いたのは、生木の引き裂かれるあつた。根元をしたたかに傷つけられた木は、自らの身を引き裂きつつ、ゆっくりと舞に向かって一抱えもあるつかという幹をゆっくりと倒れこませた。

「！」

とつさに飛びのこうとした舞だったが、右足に力が入らない分やや動作が遅れた。

木は、舞の視界を覆い隠しつつ、地響きと共にその場に倒れこんだ。



(^u^u)

## 第10話

「舞っ！」

自分が声を限りに叫んでいることなど、今の速水には認識できていなかった。

舞がロケット弾の発射を報告したまさにその瞬間、彼は舞がいるはずの観測拠点2号に向かって駆け出していた。無線機を背中に背負っていなかったら、その場に放り出しかねない勢いであった。

走り出して間もなく、ちらりときたかぜゾンビの姿が樹影の向こうにちらりと見え、ほぼ同時に爆煙が立ち上るのが見えた。

齒軋りしながらさらに速度を上げようとしたその時、顔面をひっぱたくような衝撃が通過していった。

速水はひるむことなく走り続ける。活動限界などという言葉は、彼の脳裏からきれいに消え去っていた。

観測拠点2号は、完全に破壊、いや破碎されていた。巨大な岩石が派手に吹き飛ばされ、破片が周囲に飛び散っている。ロケット弾の炸薬か、あるいはロケット燃料のどちらかは知らないが、飛び散った炎が周囲に山火事を発生させつつあった。

「舞ーっ！！！」

煙る視界に舌打ちをすると、速水を声を限りに呼ばわった。だが、応えるのは遠くから聞こえてくる木が燃え爆ぜる音だけである。

ウオードレスが抗議の悲鳴を上げるのにも構わず、速水は観測拠点であった場所をくまなく探し回る。

「舞っ！ 舞ーっ！！ いたら返事して！」

先ほどよりさらに視界が悪化する。空気がいがらっぽく、肺が熱を持っているようにすら思える。

だが、速水の背筋はまるで氷でも押し当てられたかのようにであった。先ほどから脳の片隅に、最悪の想像がこびりついて離れない。

そんなことがあるもんか！ 生きている、舞はきつと、生きてる！

彼女はすべての望みをかなえるまで、いやその後も運命に挑戦し続ける限り死ぬことはない。

根拠などまったくありはしないが、速水はそう信じていた。いや、自分が死なせはしないと誓っていた。

必要とあれば、自分の命と引き換えでも。

「舞、どこにいるの、ま……！」

舌が凍りついた。血の気が音を立てて引いていくのが良く分かる。彼の視線は、ある一点で釘付けになっていた。

観測拠点の傍らには、かなりうつそうとした森が広がっていたはずであったが、木々はロケット弾の直撃を受け、無残にもなぎ倒されていた。

その、幾重にも倒れかかった木の下から、人間の手が覗いていた。生身ではない。

「舞っ……！」

足元が崩れていくような感覚にとらわれつつ、速水はよろめくように走り寄った。

木の下から飛び出ている腕は、ウオードレスをまとっていた。手足にまったく力が入らない。頭の中で炎が荒れ狂っているのに、背中が悪寒が止まらなかった。

速水はへたり込むように腕の傍らへとしゃがみこんだ。

ウオードレスに包まれた腕はぴくりとも動かぬ。その先は木の陰に隠れて見えないが、この状況では最悪の想像しか浮かんでこなかった。

速水はおののくようにその腕をそつと持ち上げた。

戦車兵用のウオードレス、互尊の腕だった。

「ま……い……。う、嘘だろ？ まさか、こんな……」

速水の両目に熱いものがふつふつと湧き上がり、音もなく頬を流れ落ちていく。腕は、速水の手の間からするりと零れ落ちると、力

なくぱたりと横たわった。

彼の中で、何かが弾けた。

「いやだあつ！！」

肺腑のすべてをしばり出すような、壮絶な声であった。

「いやだ、返事をしてよ！ 舞、舞っ！！ いつもみたいに怒鳴りつけてくれよ、お願いだから、返事をしてくれよあつ！！」

灼熱の塊が体の中を駆け巡った。先ほど別々に配置についたことが悔やまれてならなかった。もつとも、その時にはもしかしたら死体がふたつになっていただけかもしれないが。

それでも、舞は死んだ、死んでしまった。この事實は覆すことはできない。そして、その原因は

「僕だ、僕のせいだ。舞なら大丈夫だろうなんて、油断したのがいけなかったんだ。ごめん、ごめんよ、舞……」

彼の意識は、この事實に完全に押しつぶされてしまっていた。もつとも、もし少しでもほかのことに気を回す余裕があれば、彼は腰の拳銃をためらいなくこめかみに当てていたかもしれぬ。

「でも……誰か嘘だと言ってくれ、こんなことがあつていいはずがないんだ！ 畜生、舞いつ！！」

木々を揺るがしかねない絶叫があたりにこだました。だから、周囲の雑音のせいもあつて、彼の耳に届いた声は本当にかすかなものだった。

「……うるさい」

「うるさいって、これが静かにしてられる……って、え？ 何、今の？」

きょとんとした表情を浮かべながら、速水は涙に濡れそぼった顔を上げた。見れば、互尊の腕がわずかに動いていないか。

「さつきからやかましいと思えば……。いささか気を失っていたのは確かだが、勝手に殺すな」

「ま、舞……」

今度こそ、速水は完全に腰が抜けてしまった。下半身を半ば引き

ずるように舞の手へとにじり寄る。隙間から奥を覗き込むと、木々の向こうに確かに舞の顔があった。

「舞、よかった、生きてた……」

「だから、さつきからそう言ってるではないか！　ぐだぐだ言っておらんで、この木をなんとかせよ！」

「う、うんっ！」

舞の怒声は、鞭で殴られたかのような効果を速水に与えた。ようやく腰が定まった速水は、今度は後先考えぬ勢いで舞の上に覆いかぶさった木々を取り払い始めた。

ウオードレスの悲鳴は一層ひどくなっていたが、彼はそれを完全に無視していた。

\*\*\*

「随分と、派手に散らかしたものだな」

「ご、ごめん、随分慌てちゃって……」

「まあよい」

舞は煤で汚れた顔に苦笑を浮かべながら辺りを見回した。周囲には打ち割られた木々や、救急セットの空き袋などが散乱していた。

その大半は速水の活動の結果であったが、原因はといえば、むろん舞であった。

彼女は生きていた。

だが、まったくの無傷というわけにもいかなかった。

折り重なった木々、その最後の1本を取り去ろうとした時、初めて舞がかすかに苦痛のうめきを上げた。ほとんど奇跡のように木の隙間に潜り込んでいた舞の身体、その例外である右足の痛みに発したものであった。

「これは、ひどいね……」

状況を一目見て、速水は思わず顔をしかめた。

彼女のウオードレス、その右足は粉々に粉碎され、素足が露出し

ていた。肌には血がにじみ、赤黒いあざとともに足首が見る見るうちにはれ上がりつつあった。

「なんとかくつついでいるだけ、ましだろう……痛っ！」

舞が激しく顔をしかめる。足首は、すでに元の3倍近くまで膨れ上がっていた。額に脂汗を浮かべながらも、舞はわずかに足首を動かしてみせた。骨にもひびぐらいは入っているかもしれないが、ともかく変な方向を向いたり、千切れたりはしていなかった。

なるほど、ウォードレスはちゃんと己の役目を果たしたようだ。

「ああ、動かしちゃ駄目だったら！」

速水はウォードレスの解放ボタンを押し込み、舞の右ひざから下を完全に露出させた。歪んだパンツを引き外し、滅菌パッドをあて、救急キットの中から三角巾を取り出すと、彼女の足首をしっかりと固定する。添え木は周囲の枝を拝借した。

「膝下のラバーコーティングは、外した方がいいね」

もし火にでもあぶられたら、ただではすまない。代わりに速水は残っていた包帯で、舞の右足を完全に覆い隠した。

「ちと、大げさではないか？」

「まあ、防御としては頼りないけど、ないよりはまし、かな」

「……どうやら、落ち着いたようだな」

苦笑交じりの声に、速水は思わず頭をかいた。彼の顔は涙と煤でとても見られたものではなかったが、それでも口元に浮かんだ笑顔に、舞もかすかに微笑みを浮かべた。

「そろそろ移動した方がいいな。だいぶ火勢が強くなってきたようだ。肩を貸せ」

「うん」

二人三脚に似た格好で、ふたりはゆつくりと移動を開始する。速水のウォードレスも限りなく限界に近い以上、これ以上急激な動作はできそうになかった。

と、上空からガトリング砲独特の射撃音が響き渡る。きたかぜゾンビの姿がちらりと梢を掠めて見ることができた。

複数のローター音が周囲を飛び回っていたが、不意にそのうちのひとつが調子を狂わせたかと思うと、山すそに向けて遠ざかりはつきりとした爆発音が轟いた。

「みんな、大丈夫かな……」

「急いだ方がよさそうだな。行くぞ、厚志」

「うんっ」

ともあれ、決して軽傷ではないが、舞の回収には成功した。

だが、後にふたりは、彼女の損害がまだ軽かったのだということ  
を思い知らされた。

（つづく）

## 第11話

速水たちは、まるで一步一步足元を確かめるかのように慎重な移動と、物陰に隠れながらの移動を繰り返していた。行程としてはじれったいほどにゆっくりとしたものだが、今の彼らにはこれが精一杯であった。

「舞、足は大丈夫？」

「先ほどよりはだいぶましだ。構わずにペースを上げろ」

舞の声は確かに落ち着いていたが、だからと言ってはいそうですかとうなずくわけにもいかない。なんとか足は身体についていたとはいえ、彼女の右足、ことにくるぶしはまるでボールのように腫れあがってしまっていた。

これがまったくの影響がないわけではない。事実、速水が可能な限りの慎重さで肩を貸しているにもかかわらず、1歩足を進めることに舞の呼吸がわずかにテンポを変えていた。

ともかく、今はこのまま行くしかない。

本部まで戻れば、いろいろと対処のしようもある。ともかく今は一刻も早く戻ることを考えるべきだった。

ふたりは、一体となったまま歩き続けた。上空を空自のジェット機が航過していく。射撃音とともに、また1機きたかゼンビが墜落していった。

身体のどこかを動かすたびに、速水のウォードレスは嫌な軋み音をあげていた。それはまるで、先ほどの酷使に対する抗議であるかのようにであった。

無理もない、稼動限界なぞとくに超えてしまっている機体なのだ。それでも動いてくれるだけ奇跡のようなものである。たとえば人工筋肉が伸びきってしまい、意図したとおりの動きをしなくなっていたとしても、機能が生きてさえいればやりようはある。

そう、何事も生きてさえいれば。



だが、ようやくの思いで本部に帰り着いたとき、速水は目の前の光景に呆然とし、舞さえもとっさに言葉が出てこなかった。

たしかに炎上するテントや、鬼気迫る表情で慌しくあちらこちらを走り回る小隊員もただ事でないようすではあったが、ふたりの目をひきつけて離さなかったのは、小隊員に取り囲まれて地面に横たわるウオードレスと、あたりを染め上げる真紅の血だまりであった。たった今できたばかりである紅の泉の中では、加藤が断末魔のうめきを上げていた。

\*\*\*

どんな状況でも、学ぶべき事はある。

実戦の1週間は訓練の半年に匹敵するというが、限りなく敗走に近い転戦の中で、敵襲時の反応速度は確実に上達していたといっている。

だからこそ、速水たちからの報告とほぼ同時に全員がテントから飛び出し、あらかじめ用意されていた退避場所へと飛び込むことができたのだ。それは虚脱状態に陥っていた森もまた同様であり、2、3回頬を張られた後は、むしろ他のものよりも素早く行動できていたようだ。

もつとも、ここに来たのがつい先日という状況では、退避場所といっても本格的な退避壕を作成している暇などない。森の陰や焼け落ちた建物の基礎にできたわずかなくぼみを拡張、その周りに廃材などを積み上げた応急の塹壕くらいしかないのだが、彼らはその中に躊躇なく飛び込むと、牡蠣のように壁面に身を寄せた。

動く者としてない無人の本部に、かすかにローター音が響き渡る。やがてそれが急速に強まったかと思うと、漆黒に塗りつぶされたヘリが覆いかぶさるように姿を現した。

さて、どうなるか。

善行もまた塹壕のひとつに身を寄せながら、慎重に外を覗いてい

た。速水と舞のことは心配でないといえば嘘になるが、あのふたりなら何とかするだろう。速水は気がついていなかったようだ、先ほどの叫びは筒抜けになっていた。

「焦らせないで欲しいですね」

背後で、背負い式の無線機を担いだ瀬戸口が怪訝そうな表情を浮かべたのに気がつき、善行は視線を再び外へと向けた。今のところは全員隠れたか。

急速にローター音が高まったかと思うと、連続した射撃音とともにテントがズタズタに引き裂かれて吹き飛んだ。1機が飛び去ったかと思うと、入れ替わりにもう1機が飛び込んできて同じ動作を繰り返す。

塹壕の底に身を潜めながら、善行はわずかに息をついた。

敵は今のところこちらを見つけていない。テントを射撃したのはそのためだ。もしかしたらしらみ潰しにあたりを掃射する気かもしれないが、まったく動きがないとなれば、そこまではやらないかもしれない。

どうも樂觀に過ぎるような気がするが、今それ以上打てる手はなかった。

土魂号を初めとする重装備が発見されないかが気がかりだが、それらはすべていまだ焼け残っている森林の奥に隠してあるし、バラクーダと呼ばれる赤外線遮蔽ネットもかけてある。よほど運が悪くない限り、上空から発見されることはないだろう。あとは、じっと身を潜めていれば。

善行の身体が凍りついた。誰もいないはずの広場を人影が横切ったのだ。もしかして速水たちが戻ってきたのかと思いましたが、目の前の光景がそれを否定する。一瞬ではあるが、おはね髪が目飛び込んだ。

「加藤さん！」

善行の声に、近くにいた者たちが驚きの視線を外に向け、口々に驚きの叫びを上げた。

『司令！ 加藤さんが表に飛び出したわ！』

原の声は、普段の彼女からは想像もできないほどに狼狽したものだった。善行は深呼吸をひとつすると、マイクを取り上げた。

「こちらからも確認しました。彼女は一体……？」

『良く分からないのよ。ついさっきまではじつとしてたのに、きたかぜゾンビが近づいてきたらいきなり暴れ出して……。抑えようと思ったけど、振り切られたわ。ちょっと待って』

一瞬の間の後、彼女の声は完全に驚愕に変わっていた。

『緊急！ 飛び出す時に彼女は銃を持ち出してるわ。きたかぜゾンビを撃つ気よ！』

「なんだって？」

善行は思わず耳を疑った。どこぞの映画ではあるまいし、一騎打ちでもするつもりなのか？

あくまで発見されることのないように注意しつつ、善行はするりと塹壕から身を乗り出した。どうやら加藤は本気できたかぜゾンビと戦うつもりらしいが、それはどちらかといえば無謀というほかはない。彼女の手にはアサルトライフルが握られているが、高速ライフル弾とはいえ口径はわずかに7・62ミリしかなく、戦闘ヘリの装甲を貫通できるかすら怪しかった。

『善行、どうするの？』

「ともかく、他のみんなはその場から動かないように。若宮戦士、来須戦士」

『はっ』『……』

「対空戦闘用意。万一の場合は敵の注意をひきつけてください。ただし無理はしないように」

『了解』

ふたりの声には明らかな苦笑が混じっていた。だいたいスカウト要するに歩兵にへりをなんとかしろと言ってること自体が無茶なのだ。だが、ふたりともそれ以上は何も言わずに塹壕の奥で準備を整える。その間にもローター音は再び接近してきていた。

『やい、このくされへり！』

突如、怒声が当たりに響き渡った。加藤だった。

『ちよろちよろうつくばかりで何をしてんのや。うちはここや、ちよつとでも度胸があるんなら、ここへこんかい！』

「一体どうしたんだ加藤の奴は……。気でも狂ったか？」

瀬戸口の呟きに、周囲にいたものは内心うなずきかけていた。見つかるように遮蔽物から飛び出しただけでは飽き足らず、わざわざ敵を挑発するなど正気の沙汰ではなかった。思わず何人かが飛び出そうとしかけたが、鋭い声がそれを制した。

「全員、動くな！ 今出ても的になるだけだ」

小隊員は迷いをたつぷりと含んだ視線を、善行と、そしていまやひとりで敵と対峙する加藤の間にさまよわせた。

と、外の空気が変わった。

まさか加藤の叫びを聞きつけたわけではあるまいが、再びきたかゼゾンビが接近を開始したのだ。加藤は片足を引くと、立射姿勢のままきたかゼゾンビに狙いを定める。

500、400、300。両者の距離は急速に接近していった。残り、100メートル。

「食らえっ！」

叫びと共に、加藤はトリガーを引いた。ほぼ同時にきたかゼゾンビも20ミリガトリング砲の銃身を回転させ始める。

重軽2種類の射撃音が周囲を圧した。

加藤の射線はきたかゼゾンビのコックピットに集中したが、予想通りというべきかほとんどダメージは与えられない。逆にガトリング砲の銃弾は、地面を深く刺し貫きながら加藤に向かって迫っていた。

「くっ！」

きわどいところで身体をかわすと、加藤は再び立射姿勢に戻る。効果がないことを察したか、きたかゼゾンビが再び反転してきた。

またもや両者一騎打ちかと思われたまさにその瞬間、加藤が横を

振り向いた。

『今や！ 若宮はん、来須はん！』

「！？ そつかっ！」

誰もが驚きを隠せない中、ふたりは素早く40ミリ高射機関砲を瓦礫にもたせかけるようにしながら、宙の一点を狙った。

加藤に対して直線に突っ込むコース上の一点を。

ガトリング砲に負けない重低音があたりに響き渡ると、オレンジ色の光を曳きながら、40ミリ弾がきたかぜゾンビへと吸い込まれ炸裂した。

初速の遅い40ミリ弾でも、直線機動する敵なら予測し安い。ローターの付け根で連続した爆発が閃き、きたかぜゾンビがぐらりと傾いた。敵はなんとか体勢を立て直そうとしたようだったが、程なくにぶい爆発音が聞こえて来た。

「やった！」

「なんて事を……、こっちが援護することまで予測したというのか？」

善行には珍しく、何というべきか見当がなかった。普段からして指揮車のドライバーでしかなく、ここ数日は魂が抜けたようになつていた加藤が、まさかそこまで戦術的思考を、それも、どちらかといえば無謀な悪巧みのたぐいの巡らすとは思ってもよらなかったのだ。

だが、結局それはちよつとした思いつき異状のものではなかったのかも知れなかった。やはり近接戦闘の経験の乏しさからか、彼女はひとつのミスを犯していた。

戦闘後、その場に突っ立っているというミスを。

歓声を上げかけた小隊の頭上から射撃音が聞こえたのは、まさにその瞬間であつた。

「！」

地面を縫い付ける射線は急速に加藤に近づき、今度は間違ひなく交差した。彼女の手からライフルが吹き飛び、赤黒い小さな破片

が彼女の後方に撒き散らされた。左足がありえない弧を描きながら宙を舞い、鈍い音と共に地面に転がった。

きたかぜゾンビは凱歌をあげるかのように高度を上げたが、そこまでだった。ようやくのことで敵を振り切った瀬崎の麗風が背後から1連射をかけ、これを叩き落としたのだ。残った1機は形勢不利と見たか、その場から逃走を開始した。

だが、その時には戦闘の経緯など、小隊の誰もが気にかけていなかった。彼らは次々に塹壕から飛び出すと、加藤のもとへと駆け寄った。

「加藤！」「加藤さんっ！」

やがて、救急箱を抱えた萌が彼女の傍らへとしゃがみこんだが、わずかに顔をしかめると、黙って首を振った。加藤の左足は完全にちぎれ跳び、右足も半ばちぎれかけている。それに銃弾は彼女の脇腹も深くえぐっていた。ウオードレスがなかったら、完全に両断されていただろう。

両足の止血を行い、脇腹からの内蔵流出をパッドで無理やり押さえ込み、麻薬と体して成分の変わらない鎮痛剤を注射する。萌にできるのは、そこまでであった。

速水たちが到着したのは、そんな時だった。

\*\*\*

加藤はまだ生きていたが、それは刻々と迫る最期の時を待ち受けているという以上の意味はなかった。それでも鎮痛剤が効いたのか、彼女はうつすらと目を開くと、口元にかろうじて笑みを浮かべた。

「て、敵は、どうなったん……？」

「撤退しました……。加藤さん！　なぜこんな無茶をしたんですか！」

珍しくも青筋を立てる善行に、加藤は静かにほほ笑んでみせた。  
「あのままじゃ、あいつらに蹂躪されて終わりや。そう思ったんです。」

だから罔になりました」

「……無茶だ！ 若宮君たちが間に合わなければ、ただ撃たれて終わりじゃないですか！」

「それでも、構いません」

意外な返答に、誰もが言葉を失った。

「なんだって……」

「そうしたら、なっちゃんとまた一緒になれますし。ここにはなっちゃん、いないんやもん……」

「加藤さん……」

原が、放心したような声を上げた。加藤の言うなっちゃん 狩谷夏樹は、3日ほど前の戦闘できたかぜゾンビの奇襲を受け、補給車もろとも吹き飛ばされていた。

「なっちゃんの仇に、一撃でいいから食らわせてやりたかった。それができれば、あとはどうでもよかった……」

女子の間から、かすかなすすり泣きが起こった。

「だが、それでよかったのか？ 狩谷は、そんなことを望んでいたのか？」

穏やかと言ってもいいほどの声に、小隊員が次々に振り向いた。そこには舞が、速水に支えられながらであつたが、少なくとも自らの足で立っていた。

「速水君！」「芝村、お、お前、その足……」

「かなりひどい捻挫のようだが、大したことはない。……厚志」

速水は小さくうなずくと、舞を加藤の傍らにしゃがませた。

「ああ、舞ちゃん。無事やったんやね……。よかった」

「加藤よ、お前の言いたいことは分かる。少なくとも分かるうとしているつもりだ。だが、他に方法はなかったのか？ 生きていてこそ、できることがあるのではないか？」

「どう、かな……？ よく分かんないや。でも、後悔はしてないよ。自分でできることを、やった、つもり……」

いつのまにか、加藤の関西弁が陰を潜めていた。そこにいるのは

ただの、だが、愛しき者への想いは誰にも負けない女の子だった。

呼吸が浅くなる。顔は既に青ざめるのを通り越して白紙のようだ。舞はかすかに表情を引き締めると、そつと手を出した。

「そうか。……ならば、よい。御苦労だったな」

「ありがとう、舞ちゃん……」

加藤は自らの血に塗れた手を、舞の手に重ねた。舞は微動だにせずそれを受けると、そつと両手で包み込んだ。

加藤はゆっくりと目を閉じると、大きく息を吐いた。

「なっちゃん……」

かすかなささやきと同時に、加藤の手がするりとこぼれ落ちた。

こらえかねたのか、壬生屋が泣きじゃくるののみをその胸に抱いたまま、目を背けた。

「戦場こそわが故郷。加藤よ、そなたにとって故郷は、離れ難きものであったのだな。……善行」

「何ですか？」

「加藤はここに埋葬していこう。連れて行くにはおよばん」

「……そうですね」

何人かが反感のこもった視線をふたりに向けたが、それは慌てて逸らされた。

何よりも、ふたりの表情を見れば、何も言えようはなかった。

加藤祭百翼長、1999年5月8日戦死。

軍籍から抹消された学兵である彼女に、二階級特進の追叙はなされなかった。

（つづく）



## 第12話

ここで時間は多少前後する。

目を熊本空港に転じてみれば、空港上空では、ようやく離陸することのできた空自ならびに各国義勇軍の機体が所狭しと乱舞している。彼ら鋼鉄の大鷲たちの舞台はるか下、低高度域では対空砲火がさらに激しさを増してきていた。

激しい先制パンチを食らったとはいえ、彼らは黙ってダウンしたりなどはしない。人類側の反撃態勢が整っていくにつれ、幻獣の損害は徐々に右肩上がりのカーブを描きはじめていた。

例外は多々あれど、幻獣は決して愚かではない。それが証拠に、先ほどまで大量に飛び交っていたきたかぜゾンビは、いつの間にかほとんど姿を消していた。

むろん、撃墜されたというのが最大の原因ではあるのだが、残った連中の行動は人類のそれとさして変わらない。この行動は、幻獣が衝動のみで動いているのではないという一証左であろう。

代わりに、ファントム・ファイターたち、航空機に寄生した幻獣たちは勢いをさらに増しつつあった。先ほどから航空戦力が乱舞を演じている　というより演じさせられているのはこれが原因であった。

「こんちくしょう!」

コックピットの外で世界が回転する。押し潰されるかと思うほどのG（重力）を無視しながら、瀬崎は自分から見てやや上方に見える黒い影を追い続ける。

（ヘッド・アップ・ディスプレイ）

HUDが作り出す光の環の中に、ファントム・ファイターが滑り込んできた。ガンの射程内。

「食らえっ!」

トリガーを引くと、機体下部に収納されている豊和84式20ミリガトリング砲が銃身を回転させ始め、わずかなタイムラグの後に

毎分6000発の20ミリ弾を吐き出していく。数発に1発含まれる曳光弾が、ファントム・ファイターをわずかに掠めて飛び去った。「くそっ！」

瀬崎は悔しげな呻きを上げたが、同時に余計な回避機動を取らされた敵は、基地への爆撃コースから外されていた。再び攻撃に向かうには数分の時間が必要だろう。

まあ、よしとすべきだな。

彼方へ消え去った敵のことを脳外に押しやると、瀬崎は周囲に忙しく視線を走らせる。こうも乱戦になってしまつてはレーダーはあまり役に立たない。2番機である高村も、第2中隊の佐藤・吉沢も、いつの間にかはぐれてしまつていた。

恐らく向こうは向こうで別の敵とやり合っている最中なのだろう。今の熊本航空隊には編隊戦闘を行うゆとりなどほとんど残されていなかった。

となれば、後方のカバーがない以上、見張りはパイロットとしての当然すぎるほどの義務であつた。

瀬崎の首の動きが激しくなる。ざつと戦場を見回せば、どうやら戦いは終息の方向へと向かつているようだった。先ほどまで格闘戦を演じていたファントムどもも、思い思いの方向へ避退を開始しているようだ。

むろん再攻撃の可能性はある、というよりむしろあつて当然とみなすべきだった。今日はまだ始まつたばかりであるし、敵にはそれを可能にするだけの戦力がある。陣容があまりに衰えた1枚看板の航空隊としては、このチャンス逃すべきではなかった。

今のうちに、もう1回補給をしておくか。

瀬崎はなにげなく地上に視線を送り、同時に体をこわばらせた。すっかり姿を消したと思つていたきたかぜゾンビが数機、戸島山の方へと向かつているのが目にはいったのだ。

「野郎っ！」

あそこに誰がいるか、瀬崎は良く知つていた。彼は一声叫ぶと、

機体を大きくひねらせ降下に入った。

\*\*\*

瀬崎の操る三菱／スホーイF-14「麗風」は、ベースとなった機体のニックネーム「ジュラーブリク（鶴）」を想起させる巨体を、まるで隼のごとく急降下させていった。高度計がダンスを踊り、地面が見る見るうちに接近してくる。HUDが再び情報を提供し始めた。人間の目だけでは見逃してしまいそうな変化に、四角いシンボルが重ねられた。

だが射程距離に入る前に、3機のきたかぜゾンビは、地面を舐めるような低高度を維持しつつ戸島山に接近すると、一斉に攻撃を開始していた。

「！」

山の一角に火柱が立ち上る。3機はそのまま山の上空を航過すると、急旋回して再び攻撃コースに乗っていた。

地上部隊にとって、時には航空機以上の脅威となることを改めて見せつけるかのような、執拗で容赦のない機動であった。

瀬崎はいったん機体をひねると、機体を水平に戻す。このまま攻撃しては、流れ弾が戸島山にいる連中に当たりかねないことに気がついたのだ。比較的大きな弧を描きながら、瀬崎はきたかぜゾンビとほぼ同高度に占位する。

連中は眼下の敵をなぶることに集中しているのか、回避する気配を見せていない。彼は慎重に接近を続けていた。

スピードで言えば、ジェット戦闘機とヘリコプターなど大人と子供のようなものであるが、逆にジェットは低速飛行はさほど得意ではない。それに何しろ相手は高機動性が売りである。いったん身を翻されれば、追跡するのは容易ではない。確実に、一撃でしとめる必要があった。

あともう少し　まさにその瞬間、照準に捉えていたきたかぜゾ

ンビの側面に火球が生まれたかと思うと、ぐらりと大きく姿勢を崩した。

「!？」

瀬崎は慌てて機体を半横転に持ち込んだ。右手に地面を見たまま、麗風は戸島山から離れていく。

「くそつ、なんだってんだ!？」

そう言うてはみたものの、原因は分かっている。戸島山に展開していた部隊　5121小隊が反撃に転じたのだろう。

機体を再び襲撃コースに引き戻しながら、瀬崎は正直感心していた。共に作戦行動を行ったことも一度ならずあるために、彼は学兵の装備というものにある程度の理解があった。

おそらくボフォースの40ミリだろうが、あんなイカれた装備で、よくへりを相手にしようなんて思うぜ。

ボフォースの名誉のために言うておくが、この北欧で生まれた大口径機関砲は、大威力と高い信頼性によって、開発から半世紀以上過ぎた現在に至るまで、ほとんど改良する必要もなく現役にある優秀な兵器である。ただ学兵のそれは、本来車両か艦船に搭載すべきそれを、歩兵用携帯火器として運用しているあたりが、控えめに言っても常軌を逸していた。

ま、第6世代だからできる技なんだろうがな。大したもんだ。瀬崎の感想に揶揄の成分はまったくない。こと学兵となると、自衛軍内での評価は大変に低いものであるが、少なくとも九州に配備された部隊では見識が改められつつあった。

誰もが現実と向かい合えば、多少は正直になろうというものである。

それはさておき、敵はまだ2機残っている。いくらなんでもこれまで相手にするのは荷が重かるうし、このまま地上の連中に任せっぱなしというのは、どうにもバツが悪かった。

瀬崎は再び進路を変更すると、機首を標的にぴたりと定めた。幻獣に感情があるか否か、それはいまだ解決せざる命題であるが、敵

の飛行は妙にふらついているように見えた。

敵について行動学的考察をめぐらせるのは兵士の仕事ではない。

瀬崎はわずかに進路を修正すると、トリガーを引き絞った。

銃身を回転させるモーターが起動し、機械音と共に6本の銃身が回転し始める。約0・2秒で定格回転数に達した豊和84式20ミリガトリング砲は、先ほど獲物を逃した復讐をするかのように20ミリ弾を吐き出した。

弾丸は生涯最初にして最後の弾道飛行を行い、きたかぜゾンビに襲いかかる。かなりの数の弾丸がむなく近傍を掠めすぎたが、37発目の弾丸が正面からコックピットを粉碎すると、あとはもう雪崩を打って命中を繰り返した。

これを第三者の視点から見ると、麗風の射撃音が響いたかと思うと、約1秒前後の間を置いて、きたかぜゾンビが正面から巨人の手に握りつぶされたようにぐしゃりと潰れると、そのままつのめるように高度を下げていった。

「へっ、さまあみやがれ！ あんまり好き勝手な真似をしてるんじゃないやねえや！」

瀬崎は荒々しい叫びと共に、残る1機を追い求めたが、それはすぐに中断せざるを得なかった。僚機をすべて失ったきたかぜゾンビは、それこそなりふりかまわぬという表現がぴったりくるような勢いで遁走していた。

「あの高度じゃ、さすがに面倒だな……」

瀬崎はしばし思案するような表情を浮かべていたが、いくつかの計器に目を落とすと、仕方なさそうに首を振った。

いくら彼でも、得物もなしには戦いようがない。

「ブレイブよりコントロール。ビンゴ・フュエル（基地に帰還する燃料ギリギリ）にはちと早いが、補給を行いたい。許可願う」

『こちらコントロール。ブレイブ、敵は後退したようだ。着陸を許可する』

「了解。整備の連中によりしく言っといてくれ。さて、と……」

瀬崎は地上に目を凝らす、戸島山の様子はよく分からない。ただ、あちこちから煙が上がっているところを見ると、まったくの無傷というわけにはいきそうになかった。

こんなくらいしかできなくて、すまねえな。無事でいてくれよ。

瀬崎はもう一度地上に眼をやると、翼を翻して基地への進路に乗った。

結論から言えば、瀬崎の行動は5121小隊の助けになったことは間違いない。だが同時に、彼の願いがかなえられることも、またなかったのだ。

(つづく)

## 第13話

1999年5月8日(土) 1005時

熊本市 戸島3丁目付近

不意に、静けさが訪れた。

いまだ周囲では幾筋もの煙が立ち昇り、無残に焼け落ちたテントや物資が転がり、戦の爪痕はまざまざと残っているが、少なくとも戦場音楽ははるか遠くに去っていた。

無尽蔵の回復力を誇る幻獣といえども一時に注力できる戦力には限界がある。これまでの戦いで大半の戦力が撃墜されるか撤退するかした結果、戦闘は鉈で断ち切られたような唐突さで幕切れとなった。

だが、兵士たち 5121小隊の隊員たちの動きは止まらない。むしろ、ようやくのことで訪れたわずかな間隙について、次なる事態に備えなければならなかった。そのようなことに時間を割くことができるという事実自体が、この戦場においてはある意味贅沢であるとも言える。

このような時間が取れた原因は、今回の攻撃は航空兵力だけで行われたことにあった。

航空戦力は強大な破壊力を持つが、その性質上長時間の制圧というのはどうしても難しい。これが地上兵力と連携しての攻撃であったならば、おそらくこのような余裕をもつこともかなわず、5121小隊はなし崩しに押し切られて撤退、あるいは存在そのものが歴史上の彼方へと押しやられていたかもしれぬ。

だが、幻獣どもは戦闘においてもつとも肝心といえる連携がまったく見られなかった。ただ衝動のままに動き回り 実際には、すでに見たように個々の行動は決してそうとは言いがたいのであるが破壊の限りを尽くす。このあたりが、いまだ幻獣に知性を認め

ない者たちの論拠にもなっているわけだが、連携云々という点については、過去散々になしている不行跡もあることだし、人間もそうたいした事は言えないであろう。

とにかく、かりそめであろうとも訪れた平穩の時に、彼らがなすべきことは山ほどあった。

死者を葬るというのも、そのうちのひとつである。

「総員、整列ッ！」

いつもよりはやや抑えた、それでも背筋を伸ばさずに入られない号令が焼け跡に響き渡った。いまやさらに数を減じた小隊員たちを見回すと、若宮は善行へと向き直った。

「司令、小隊全員揃いました」

善行が小さくうなずくと、それを合図として速水、瀬戸口、滝川、それに壬生屋の4人が前に進み出た。一同の前には黒いゴミ袋にも似た死体収容袋が横たえられている。

4人はそれぞれ袋の四隅をつかむと、そつと持ち上げる。袋からは複数の物体がぶつかり合う感触が感じられたが、誰も、なにも言わなかった。

彼らの進む先には穴が掘られてあり、焼け残った棒杭が立てられていた。棒杭は片面を軽く削られ、マジックで書いたらしい「加藤祭之墓」の文字が真新しい削り口にやけにはつきりと見えた。

4人は穴の両脇に立つと、袋をゆっくりと穴の底に下ろしていく。急ごしらえのことで穴はさほど深くはなかったが、それでもどうにか袋は穴から顔を出さずにすんだ。

彼らが加藤を埋めている間、残された一同は直立のまますべてが終わるのを待ち受けていた。舞も、即席の杖にこそ頼っていたが、可能な限り直立の姿勢を崩さずに、新たに出来上がるうとしている墓から視線を外そうとはしない。

誰もが一言も発さず、また、その面には何の感情も浮かんではいなかった。わずかにののみがなにか言いたげではあったが、それで



も唇をかみ締めて必死になにかをこらえている。各々の顔を見れば目を赤く潤ませた者、頬を濡らした跡もあらわな者といたのだが、すでにここに至るまでにすべての感情はほとんど使い尽くされてしまったようである。

やがて、最後のひとすくいがかけ終わった。完成した土まんじゅうの前に、どこから見つけてきたものか、名もないような一輪の花を植えると、4人は無言のまま列へと戻っていく。

入れ替わるように善行が歩を進めると、墓に向かって小さく一礼した。

「麦穂落ちて新たな麦となるように、加藤は落ちて新たなものとなる。その身と魂は、われらの知らぬところで、新たな生となるだろう」

善行の声が、静かに一同の間を流れていく。その声に誘われるように、かすかではあるが再びすすり泣きの声に加わった。

これが、あなたにとって最善の解決策だったのですか？

善行は胸中でそっとひとりごちた。彼女の行動を止めることができなかったという事実は、指揮官としてむろん反省すべき点であった。だが、ひとりの人間としてかつての、そして今の加藤の状況を見たとき、どこか納得しそうになる自分がいるのも確かであった。

莫迦な、死なせてやるのが慈悲だとも言うつもりか。

善行は自分自身を罵倒した。だがそれも、どこか定めきらぬような響きを宿していた。

「……次もまた、ともに戦う戦友となることを願う。……良い旅を。ゴッドスピード、加藤」

『ゴッドスピード、加藤』

皆の声が、重々しく唱和すると、若宮がこれ以上伸ばしようがないほどに背筋を正す。

「総員、勇敢に戦い散った加藤百翼長に対し……敬礼ッ！」

ざっ、と風が鳴った。それが今、幽冥の彼方へと旅立ったクラスメイトに対する、彼らが為しうる最大の別れであった。

加藤を埋葬し終わるまでに、時間にして10分も経っていなかった。解散を命じられた一同は、加藤のことなど忘れ果てたかのようにそれぞれの作業へと戻っていく。

もし準備が整わなければ、また誰かが死ぬかもしれない。今の彼らにそれ以上仲間との別れを惜しむ余裕などありはしなかったのだ。後には加藤を除いた、元指揮車のメンバーが残っていた。

「東原さん、これを」

善行はしゃがみこんで視線を下げると、なにかを差し出した。それは、ちよつと見ると筆の穂先のようにも見えた。

「いいんちょ……ううん、しれー、これは？」

「加藤さんの……遺髪です」

ののみはくしゃりと表情をゆがませたが、泣き声は上げなかった。片方を糸で巻きとめたそれを、彼女はそつと受け取ると両手で包み込んだ。

「ご苦労ですが、これもあなたが預かっておいってください」

「は……い」

ののみはどうかうなずくと、遺髪と一緒に渡された布でくるみ、腰に着けたポーチの中にそつとおさめた。中には、他にも同じようなものがいくつ収められていた。

5121小隊は、この一連の戦いの中ではかなり幸運な部類に入るといつていいだろう。十数度に及ぶ戦闘の中で、戦死者を出した戦いはこれまで1回しかなかったのだから。それも、正面切った戦闘では加藤を除き、ただのひとりも失つてはいなかったのだ。

そのただ1回は、第5世代の半ばテロにも似た奇襲攻撃で引き起こされた。部隊が戦場からいったん引き上げる準備のため、誰もが緊張の糸から解き放たれたその瞬間を狙い、横合いからロケット弾を撃ち込んできたのだ。

この一撃で補給車は大破したが、さらに運の悪いことに弾薬に引火し、後ろ半分が完全に消し飛んでしまった。移動前であったこと

から大半の者は補給車から降りていたが、撤収準備をしていた新井木と狩谷は爆発の中心にいたのだからどうにもならなかった。

ラインより先にスタッフに戦死者が出たのは、以上のような理由による。

善行は彼らの遺品や遺髪をすべてののみに預けている。一瞬の油断がもたらした損失を忘れず、そして万一生き延びることができたときには、改めて彼らを弔うために。

もっとも、新井木は遺髪を取ることができたが 正確には頭部以外は見つからなかったのだが、狩谷は遺体の収容すらできなかった。近くに転がっていた壊れた眼鏡がかるうじてそれであると区別できるだけであった。

狩谷の眼鏡は一時加藤の手にあったが、今はすべてののみのポーチに収められている。

善行はののみに、それらを必ず最後まで手放さぬように指示していた。

それは、彼なりの決意なのかもしれない。

瞬転、あたりに緊張が走る。無線機に取り付いていた瀬戸口が、緊張を含んだ声で、

「マザーバードより緊急入電！ 敵部隊の一部が熊本空港方面への侵攻を開始したとのことです。現在のところ総数1000前後。広範囲に広がっているそうですが、徐々に増加傾向にあり」

「このあたりには？」

しばしのやり取りの後、瀬戸口が顔を上げた。

「第1波の概算、80前後。その後方に複数群を認む」

「総員、戦闘配置！ 全士魂号クールよりホット！ 前期即時発進体勢！」

空間を切るような善行の号令に、誰もがはじかれたように走り始めた。怒鳴り声に近いやり取りの中、小なりとはいえ戦闘組織としてくみ上げられた5121小隊は、急速に敵を迎え撃つ体勢を整え

つつあった。

「我々も移動します。瀬戸口君、東原さん」

「了解」「はいっ」

「石津さんは後方に待機、負傷者発生に備えてください」

「了……解」

指揮をするには戦場の状況を把握する必要がある。指揮車を失った今、そのためには見晴らしのいい場所へと移動するしかなかった。危険は確かに伴うが、それは元から承知の上である。

「1番機、2番機、3番機、全機即時発進準備完了！ 戦闘力85パーセント！」

「予備弾薬準備完了、整備班待機位置に着きました。個人戦闘装備装着済み」

「こちら舞、センサーが敵の先鋒を感知した。数2、5、10、なおも増加中」

『スカウト両名、偵察ポイントに展開完了。定置センサー散布完了』  
曲がりなりにも敵を迎え撃つ準備は整った。善行はマイクを口元に当てる。

「総員聞け、我が小隊はこれより迎撃戦闘に入る。ここは熊本空港最後の防衛地点といていい場所だ。各員いつそう奮励努力し、全力を尽くせ」

ここで一呼吸間があった。

「ただし、これはまだ第1波に過ぎない。戦いはおそらく長期戦になる。最初から力みすぎず、市民が脱出する時間を可能な限り稼げ。死ねとは言わない、ただ生き延び、敵の足を可能な限り止める。すべては生き残ってこそだ、いいな？」

『了解！』

そう、何もかも、すべては生き残ってからの話である。そうでなければのみに下した指示など、茶番以外の何者でもなくなってしまう。善行はかつての過ちをここで再び繰り返す気などさらさらなかった。

「熊本空港に航空支援を要請」

「了解。……応答あり、可能な限りの支援を約束することです」  
「よろしい。……士魂号、前へ！ 人類に勝利を！」

かくて5121小隊は、市民たちと、そして自らの未来を掴み取るために、再び鉄と血の嵐の中に再び足を踏み入れていった。この戦いは、後に5121小隊最大の戦闘のひとつに数えられることになる。

もっともそれは、熊本空港に場所を移してからのもそれよりはまだ楽であったと彼らが知るのには、もう少し先の話であった。

（つづく）

## 第14話

1999年5月8日(土) 1030時

熊本空港 航空隊司令室

「終わった、か……」

後藤はようやくのことでデスクから顔を上げると、目元を強く揉みこんだ。

しばらく前に敵がすべて撤退した後、彼はいち早く司令室に戻ると、中断された書類仕事を再び猛スピードで片付けていた。そのうちの何割かは悪弊極まりない官僚的書類仕事であったのだが、同時にそれは本隊である西部方面航空隊に対する増援要請や意見陳述など必要不可欠な手続きでもあった。

後藤自身に言わせれば、この火急のときに何をやらせるのか、と思わなくもなかったが、組織は巨大であればあるほど、書類と稟議から逃れることができなくなる。熊本航空隊の内部であれば格別、対外的には一応体裁を取り繕う必要もあるのだ。

それに、その他の書類も不要なわけではない。この航空隊があくまで命令に基づいた判断の上での戦闘加入 必要やむを得ざる場合を除き、一切の戦闘を禁止する であるということは、将来のことを考えれば絶対に証明が必要であった。

「……ま、かなり曲解のような気もするし、この書類ごと俺らが消えてなくなる可能性もあるんだがな」

なるべくならそうはならないよう、後藤はあらん限りの力を持って対応をしてきたつもりであった。とはいえ、残存戦力が両手で数えたほうが早くなつた現在では、取るべき手段は徐々に限られたものとなつてきていた。

「ふん、あれもだめこれもだめ、か。色々と面倒なもんだ。……なんだかなあ」

ばやきながらも彼の手がとまることはなく、最後の書類にサインを済ませていた。

「さて、これで一段落、っと」

もちろん、書類など後から後からまるで泉のように湧き出てくるものだが、どこかで区切りをつけなければ切りがなくなってしまう。立ち上がった後藤は、コーヒーマーにわずかに残っていたコーヒールをカップに注ぐと、一息に飲み干した。

「……うぶっ、なんだこりゃ？」

口の中をさす焦げ臭い苦味に、後藤は思わず顔をしかめた。どうやらウォーマーのスイッチが入りっぱなしになっており、煮詰まってしまったようである。

なんともひどい味もあったものだが、ともかくも目は覚めた。胃の具合のほうに気にならないでもないが、先ほどの田中の差し入れのおかげでなんとかかなりそうだった。

「……でも、チョコレートも確か刺激物じゃなかったか？」

そう思いかけ、田中は苦笑を浮かべた。自分の胃の心配ができるようなら、まだ大丈夫であろう。

と、その時。ドアが遠慮がちにノックされ、年若い兵士が顔を出した。

「失礼します。司令、会議のお時間ですが……」

「あ、そうか。分かった、すぐ行くから待っててもらってくれ」

「分かりました」

兵士　空港警備に回された陸上自衛軍だった　は敬礼すると、駆け足で戻っていく。後藤は机の上やその辺りに散らばった書類から必要なものを抜き出すと、会議室へと向かった。

会議室では、中央にしつらえられたテーブルの周りに10数人ほどがすでに着席しており、後藤の到着を待ち受けていた。

「いやどーも、遅くなって申し訳ない。それじゃ、早速始めるとしましょうか」

後藤の口調に、会議室の空気がわずかに和んだ。おそらくは意図的な口調であると誰もが気がついていたであろうが、彼の意図を汲み、芝居に付き合うことに決めているようだ。

「司令、学校だったら廊下に立たされているところですよ」

ウォードレスに身を包んだ男子学兵が、陽気な声を上げた。短めに刈り上げた茶色い髪は寝癖のせいはいささかおかしい方向を向いており、顔にもいささか疲れの色が出ていたが、目には愛嬌があった。

「そりゃ困ったなあ。廊下は冷えるんだ」

「年は取りたくねえもんだな、司令？」

「おやつさんに言われるとは思いませんでしたが……」

後藤が角刈りの頭を掻くと、どっと笑い声が起き 皆の表情が改められた。ウォーミングアップはここまでということらしい。

着席した後藤は、軽く咳払いをすると会議の開始を宣言した。

会議室の様子を一言で言い表すならば、種々雑多というのがいちばんふさわしいであろう。そこには熊本航空隊や空港関係者はおろか、陸上自衛軍、生徒会連合、それにどういったわけか海上自衛軍の制服を着用したもののまでが着席していた。つまり、熊本空港ならびに熊本市、そして近接区域の関係者がおおむね一堂に会しているわけだ。

もつともおかしいといえば、この会議における後藤の立場である。彼は事実上この方面の撤退作戦 ということは、全九州の撤退作戦の指揮を執ることとなっていたのだ。

いくら戦局が混乱しているとはいえ、たかが一航空隊の司令が地方とはいえ全軍の指揮を執るなど通常ならありえないことだったが、そこにはそれ相応の理由もあった。一言で言えば、他にまともに指揮を執れる人材ならびに組織がなかったからに他ならなかった。

九州の戦況はそこまで追い詰められていた。普通に表現すればそう言えたであろう。九州における組織運営という面から見れば、



陸上自衛軍ならびに海上自衛軍はその存在を消滅させていた。

まず海上自衛軍だが、九州各地の根拠地は1998年の八代平原攻防戦の前後に発生した戦闘の中で次々と能力を喪失、閉鎖に追い込まれていた。もちろん海上に目を転じればいまだ強力な戦力を有していたものの、それを九州の側からサポートすべき組織がなくなっていたのだ。だから、今ここにいる海上自衛軍の連絡士官は、海自にとって失われた九州との絆、その数少ない生き残りであった。

ならば、この戦争を通じて常に最大戦力を展開させていた陸上自衛軍はどうかというと、こちらも同じく八代平原攻防戦で全戦力の7割を喪失するという痛手をこうむっていたこともあり、まったく期待はできなかった。

ことに後方支援組織、すなわち兵站・通信・指揮統制関係の損害が著しく、開戦時から色々と不都合が発生させていたことはすでに周知のとおりであるし、そうでなければそもそも学兵がこの地に送り込まれることもなかったのだから、今更言うまでもないことでもある。

それでも彼らは残り少ない戦力でよく戦っていたともいえるが、5月はじめの総撤退命令前後に発生した第5世代による奇襲攻撃により、本来撤退指揮をとるべき九州方面総司令部が壊滅してしまっていた。このため各師団はなかば確固の判断で戦闘を行わざるを得ず、ようやく熊本空港に仮の拠点が再建されたときには、わずか数日でそれまでに匹敵するほどの損害をこうむっていた。

いかに師団が独立行動が可能な戦闘組織とはいえ、戦略的立場での指揮がなければ連携を取ることも難しいのだから、彼らを非難するにはあたらないかもしれない。

だが、戦力面ではいっそうの苦境に立たされることになったのもまた間違いなかった。

そんな中、航空自衛軍は戦力的には最も少数派であったが、皮肉なことにその分まあまりがよく、指揮運営という点からではさほど問題を感じていなかった。むしろ空自とて、鹿児島や宮崎など九州

各県での損失はあったのだが、いち早く損害を受け、なおかつその後の出撃が禁じられた間に再編が進められていた関係もあり、現時点ではもつとも安定した組織と拠点を残していたのだ。

これに加えて脱出の要である熊本空港を擁している点も考慮され、現在の指揮体制が構築されている。当然各組織からは可能な限り連絡将校や参謀が派遣され、不足分のカバーを行っていた。

それでも、俺が救出作戦総司令つてのは変な話なんだが、ま、仕方ないか。

後藤は心の中でひとりごちると、司会役の副司令に視線を向けた。「それでは概況から。先ほどの敵の攻撃により、損害が発生しています。具体的に言いますと、滑走路は1本が爆撃を受けましたがその損害は軽微、まもなく復旧できますが、ターミナルへの攻撃でかなりの損害が発生しており、搭乗口が1本全壊、待合ロビーも損傷を受け、今後の発着回数に影響が出るものと思われます。現在、搭乗方法と発着プランの変更を行っておりますが、最大で5%程度発着回数が減少することは避けられないでしょう」

副司令である安田は時間を無駄にせず、淡々と事実だけを読み上げていった。

「また、避難民への攻撃により、現時点で分かった範囲で、少なくとも2000名前後の死者が出ています」

列席の面々から、うなりに似た声が上がった。

「各部隊の協力を得て遺体の回収作業を行っていますが、身元の判別が難しいケースも見られ、また、現状をかんがみて、遺体はすべて滑走路脇に埋葬するしかないものと思われます」

安田の表情もゆがんでいたが、同時に妥当な処理でもあった。現状では死者にそれ以上時間もゆとりも割く事はできなかったし、輸送力はすべて生者のために使われるべきであった。

「すぐに身元が分かる場合、遺品の回収と所持はこれを認めるように」

後藤の言葉に、安田も他の面々もうなずいた。遺体の処理など、

最終的には重機かなにかでまとめて穴に放り込むしかないのだから、せめてそのくらいは認められるべきであった。

「それと、8日10時時点までに脱出した避難民の総数はおよそ185000名で、これは予定のおよそ78%にあたります」

居並ぶ面々から、感嘆とも慨嘆ともとれる声が漏れた。一地方空港である熊本空港での乗降人数としては、施設の大型化・24時間運用化と非常事態による無茶を承知のスケジュールを考慮に入れてもなかなかのものであった。

だが同時にこの人数は九州1400万市民の1.3%に過ぎず、熊本市のみを考えても3割弱でしかない。たったひとつの空港では限りがあることを承知していても、どこか複雑な思いがあるのは致し方なかった。

「今後の予定は？」

どこか想いを断ち切るような後藤の声に、安田は救われたような表情を浮かべた。

「現在約40000名の避難民がターミナル、ロビー、ならびに空港周辺の仮設テントに待機しています。このほかに周辺地域からも順次到着しつつありますが、その数は平均1時間でおよそ2000名弱と、当空港の1時間あたりの処理能力をわずかに上回る程度にとどまっています」

安田がちらりと視線を向けると、陸上自衛軍の士官が立ち上がった。避難民担当となっている立川少佐は、どこか言いにくそうに言葉を継いだ。

「この人数は、時間を追うごとに減少していくものと思われます。戦局の悪化に伴い、熊本空港より東の区域では、鉄道や道路などを利用して佐賀・大分方面への脱出に切り替えたものもありますが、熊本市以外からの避難民の流入が急速に減少しつつあります。理由については……後ほどの戦況確認が説明になるでしょう」

「市内からの避難民は？」

「今のところは、ほぼ横ばい状態ですが……」

立川の声が急速にしぼんだ。

これも、この後で分かるということか。

立川が言わんとした事実には、一同の間に沈黙が流れた。  
(つづく)

## 第15話

「続いて、現在までの戦況と我が軍の戦力についてですが……。これは各部隊から報告してもらったほうが早いでしょう」

安田が視線を向けると、第8師団の三橋参謀長が立ち上がった。

「それでは、簡単に説明しますので、パネルをご覧ください」

会議室の前面にしつらえられた液晶パネルに、ワイヤーフレームで描かれた九州の地図が表示され、その中に単純化された記号で両軍の戦力が表示されている。同時に両軍勢力比が地域ごとに赤から青のグラデーションで表示されていたが、どこもかしこも赤　敵が優勢であることは言うまでもない。

「現在九州に展開している3個師団はいずれも戦闘力を維持していますが、実質的な戦力は定数の半分がいいところです。このうち福岡を中心に展開していた第6師団は、福岡の陥落にともない後退を開始、日本海側を北九州市に向かいつつ、遅滞防御戦闘を展開しています。残存兵力は概算8000名、重火器・戦車などの戦闘車両は当初の3割というところです」

自衛軍の歩兵1個師団はおよそ20000名だから、これはもう軍隊の全滅　戦力2割喪失　をはるかに超えた損害だといっていい。それでも彼らは避難民の後衛となって戦闘を続けていた。

「まあ、こちらはいまだ北九州との補給路が確保できていますから、兵站にもある程度のめどが立っています。問題は残りの2個師団のほうで、第4師団はおとこの戦闘で師団司令部が全滅し、組織的連携を取ることがいつそう難しくなっています。現在は連隊規模の判断で宮崎・大分の県境を中心に防御戦闘を行っています」

もともと第4師団は南九州を守備範囲としていたが、八代平原攻防戦以降は熊本県南部から宮崎県北部を結ぶラインで防衛の任にっていた。今回の戦闘では敵の主軸にまともなぶち当たる形となり、後退につぐ後退を行わざるを得ないのが実情であった。

「現在の残存兵力は？」

「およそ2個連隊、10000名弱、機甲1個大隊を含む車両120両といったところです。このうち歩兵2個大隊が宮崎側への移動ルートが断たれたため、第8師団の指揮下に入っています。で、その第8師団ですが、各地の残存部隊を吸収したため、いまだ当初の7割ほどの戦力を維持していますが、敵の侵攻を食い止めるにはいたっていません。先ほど入った情報では、熊本市内に展開していた後衛部隊2個大隊は損害著しく、これ以上の戦闘は不可能と判断、後退を開始いたしました」

周囲がわずかにざわめきたった。三橋は苦渋の表情で先を続ける。「これに伴い、熊本南部および北部でも戦線の縮小を決定。順次後退と遅滞防御戦闘を繰り返しつつ、全部隊が熊本空港を中心として周囲5キロから7キロの地点に防衛線を再構築する予定です」

ざわめきが大きくなる。空港周囲5キロから7キロということは、重砲による攻撃があつた場合十分射程距離圏内ということになる。幻獣の長距離兵器はレーザーが多いから地平線の向こうからの攻撃ということはあるが、危険度が上がることは間違いない。

これは同時に、5121小隊が曲がりなりにも休息してみた時間をとることができた最大の要因であつた。

「……ま、全部守るってわけにはいかないか。ということは、北部も同様ですね？」

「はい、司令。菊池市を中心に展開していた第42歩兵連隊の残存3個大隊ならびに独立第8機甲大隊も、本日正午をもって後退を開始します」

あまりに無情な死刑宣告にも似た報告が続く中、市民の安否について尋ねる者はひとりもいなかった。あらかじめ各部隊には市民の安全を最優先に行動するよう命令が下っていたが、これにはひとつ例外が設けられていた。

損害に見合う市民救出が見込めないと判断した場合は速やかに作業を打ち切り、後退すべし。

つまり、すでに各部隊は救うべき市民が存在しなくなりつつあると報告しているに等しかった。

「各部隊は現地で収容できた避難民と共に後退することになっており、現在のところ避難民の総計は各部隊総計で12000名ほどとなっています。途中通過地域で合流する者もいるでしょうが……立川少佐、そのあたりはどうか？」

「はっ、最終的にはその3倍、およそ40000前後になる見込みです。むろん、増減はあるでしょうが……」

「できれば、多いほうに誤差があつて欲しいものだなあ」

後藤もこれについては願望交じりの意見をいうぐらいしかできなかった。

「まあ、そのあたりの状況は分かりました。では次に生徒会連合」

後藤の声に、室内の視線が一点に集中した。現在のところ生徒会連合九州軍代表行ということになっている男

いそだ としお

磯田俊夫上級万

翼長は、すっかりついてしまった寝癖を掻きながら手元の資料を取り上げた。

「あー、こちらにも損害はかなりのものになっています。この戦争で徴兵された学兵は、4月末の時点で146728名となっておりますが、昨日時点での推計では、残存はおおよそ70000人を少し超えた程度つてところとなっています」

磯田はいかにもしゃべりにくそうに手元の資料を読み上げていく。それもそのはずで、磯田は元々本部付き警備大隊を率いていた、つい先日まで一介の大隊長に過ぎなかったのだ。

彼がこの場にいる理由としては、自衛軍と同時に実施された第5世代の司令部奇襲攻撃が挙げられるだろう。この攻撃で九州軍総司令官である林凜子が重傷を負い、彼女は負傷しつつも現地での指揮を優先しようとしたのだが、参謀本部の高級参謀数名が死亡し、残された参謀たちが動揺のうちにいち早く熊本からの撤退と、山口から指揮を執る旨宣言したのだ。

最初報告を聞いたとき、磯田は自らが警護すべき対象の狼狽ぶり

に、開いた口がふさがらなかった。一体何をやっているのかというのが正直な感想であった。

海の方こうから指揮されたからって、はいそうですかって従うやつがどれほどいると思ってるんだ。

実際、林凜子を病院に強制収用させ、参謀本部を中心として再編された新司令部はあれこれと命令を下し続けているのだが、病院にいる総司令の安否を気遣う者はいても、司令部の命令にまともに取り合う者は、少なくとも九州には誰もいなかったといつてよい。ちなみに、その中に芝村準竜師の姿はなかった。

芝村参謀総長は結構反対したらしいんだがな。いくら芝村でも数の暴力には勝てなかったか。善行さんから聞いた限りじゃ、血迷った連中が銃まで突きつけて拉致同然で撤退する途中、姿をくらましたって話だが……。

準竜師のひねくれ具合については、磯田も本部にただけあつて十分にわきまえていたが、それでもこと作戦能力と判断能力については一定の評価を与えていた。準竜師が山口の莫迦どもと行動をともししていないという事実は安心というか苦笑するしかないという複雑なところであつたが、少なくとも絶望という方向には向かつていなかった。

もつとも、それが慰めになるわけでもないのだが。

ともかく、いきなり空白になつてしまつた指揮系統のトップを誰かが埋める必要があつた。残された者にとつては、たとえそれがイワシの頭であつたとしても、ないよりはるかにましであつたのだ。そこで、本部に残された者のうち最高階級者であり、善行とも関東で知り合いであつた磯田が仮の代表代行となつたというわけであつた。

芝村参謀長も、ただで転ぶようなタマじゃないからな。なにが考えあつてのことだろうが、まあ難儀なことだな。

善行からの情報と、自分なりに調べた結果たどり着いた結論がそれであつた。が、ともかく今は、お偉方が尻をまくって逃げ出した



後始末をするほうが先決である。磯田としては、むしろ善行あたりに代わってもらいたい気分だったのだが、前線指揮官も足りない以上、自分よりは彼が前にいたほうがまだましであることも確かであった。

「じゃあねえか。善行さん、あとでおごってもらいますよ。」

磯田はため息を飲み込むと、報告に意識を戻した。

「正直頭数としては結構なものですし、これらすべてがともに戦力になればたいしたものです……。残念ながらこのうち4割以上が訓練未了で、ともに戦力にはなりません。およそ30000名、臨編6個大隊程度になりますが、こいつらは最低限の装備を持たせた上で、装甲車両は貴重ですから、移動手段のほとんどはトラックか民間車両ですが、大分へ向かう避難民の警護にあたらせています」

「万一の場合には、避難民と行動を共にできるように、つてところかな？」

後藤の問いに磯田は表情をこわばらせ、皆の間には緊張が走った。聞きようによつてはそれは、脱走をする気かと問われたに等しかった。

「……そうです」

文句があるかと後藤を睨みつけながら返答した磯田であったが、当の後藤が笑顔を浮かべるのを見て呆気にとられてしまった。

「あ、それならいいかな。避難民にも護衛は必要でしょうからね。で、続きを」

「あ、はい。……残りは自衛軍と同じく、熊本市内と熊本空港を中心とした半径およそ5キロ前後に防衛線を展開しています。ただ、どの部隊も重火器の損耗が激しく、補給がなければ撤退期限である明後日までもつかどうかは難しいところですね」

学兵の補給が厳しいのは戦争が始まった当初からの半ば常識となっていたが、理由のひとつにあまりに独自すぎる兵器体系もあった。弾薬は可能な限り自衛軍と共通の規格が採用されていたが、学兵し

が使用していない兵器も多く、そういったものはいったん弾薬が底をつけば放棄せざるを得なかったのだ。

と、そこで、三橋参謀長が不意に口を挟んだ。

「そのことだが、補給のほうはこちらで少しあてがある。そちらにも回るようなんとかしよう」

磯田は多少驚きはしたものの、軽く目礼をして感謝の意を表した。

三橋が言うからにはそれは自衛軍仕様　つまり、第4世代向けの兵器になるのだろうか、今はたとえ火縄銃でもありがたい心境であつたのだ。

「ともかく、熊本市内には現在もおよそあちこちから撤退してきた20個小隊が展開しており、各部隊は現在も遅滞防御戦を展開しつつ、徐々に後退を開始していますが、幻獣の進出が激しく、損害が増加しています。最終的に防衛線まで後退できるのはどれほどになるか、正直見当が付きません」

磯田の声にはかすかに棘があつたかもしれない。正規軍である自衛軍のほうに先に後退し、彼らはその後詰として戦っているのだ。

疲弊しているとはいえ数的には優勢な戦力差、そして皮肉なことに半ば見捨てられる予定だつた存在だけになりふりかまわぬ努力を傾けた結果、学兵が保有する装備の機械化、機甲化率がやたらと高い単純に部分的には自衛軍より高い戦力を持つからそうせざるを得ないというのは分かつていたが、理解と納得は別物である。

「ご苦勞様です。我々も十分な援護は行います。正直心苦しくはありますが、今は君たちに任せるしか方法がない。ふがない大人たちで申し訳ないが、よろしく頼みます」

後藤が頭を下げると、他の自衛官たちもそれに倣って一斉に磯田に向かつて頭を下げた。彼らは、自分たちが誰の尽力によつてここに生きながらえているか、十分に理解していた。

「あ、い、いや、俺は別にそんなことをしてもらうつもりじゃ……。ともかくつ、俺の戦友たちは最善を尽くしています。ただそれが大変に厳しいものであることはご理解いただきたかつた、そういうこ

とです」

「分かっていますよ」

それは決して言葉だけのものではなかった。

しばし休憩を挟み、会議は続く。次に立ったのは海上自衛軍の連絡士官、浅川少佐だった。

「現在海自は関門海峡を中心として2個護衛艦隊を展開、撤退する艦船の護衛と周辺制圧、九州各地への航空支援を中心に行っています。撤退支援のほうは福岡、大分などの各港から主に民間船と輸送艦がピストン輸送を行っており、距離が近いこともあって比較的順調との報告が入っています」

「航空支援のほうは？」

「第1機動護衛艦隊の航空護衛艦『しょうかく』級2隻が宮崎沖で、第2機動護衛艦隊の『たいほう』級2隻が関門海峡でそれぞれ展開しています。両者あわせておよそ250機が宮崎、熊本南部を中心として攻撃を行っていますが、敵の反撃も激しく、艦載機の損害が徐々に増えつつあります。今の調子では、明日には艦隊の半分は航空機の補充を受けないと攻撃が続行できないでしょう」

「明日は、敵の動きが激しくなる可能性がある、か……」

誰かの呟きが、意外にはつきりとテーブルの上を流れていった。

「このほか、熊本港からの船舶による脱出を援護すべく、装甲護衛艦『やまと』を中心とした第1護衛艦隊が急行中です。明日未明までには熊本湾に突入、艦砲射撃などで脱出の支援を行う予定です」

誰もが一瞬驚きの表情を浮かべたが、最も素直に表現したのは磯田であった。

「ちよつといいですか？ これまでの計画では第1護衛艦隊がそんな行動を取るなんて連絡はありませんでしたが……」

「ええ、そうでしょうね。私も知ったのはついさっき、第1護衛艦隊の司令じきじきに連絡を受けたばかりですから」

後藤は怪訝な表情を浮かべた。総司令部からの連絡なしに、実行

部隊のみからの連絡というのはいかにも奇妙だった。視線に気がついた浅川は、いたずらを見つけられた子供のような表情を浮かべた。「本作戦は、総司令部の承認を受けてはおりません」

「なんだって？ ……すると、独断ですか？」

「そういうことになります。今頃総司令部は大騒ぎでしょうな」

けろりとした表情でとんでもないことを言われ、誰もが毒気を抜かれたような表情を浮かべていた。

「我が海上自衛軍は、これまでの戦闘であまりにも為すところなく過ごしてきました。航空自衛軍もそうだと仰られるかもしれませんが、海自は九州に対し、借りがあつた気分なのです。今回の第1護衛艦隊の熊本突入は、それに対する我々の回答と考えていただきたい」

浅川が着席すると、後藤が困つたように苦笑いを浮かべていた。

「なんだかなあ……。そりゃ平たく言えば反乱じゃないですか。とんでもないことをしたもんだ。しかし、我々にとっては大変ありがたくある話です。ただ……」

「なんででしょう？」

「他の艦隊は、どうされるのですか？」

「彼らが今何をやってるかは今ご報告したとおりです、……それが答えです」

「……違いありません」

後藤の苦笑が大きくなり、さらになにかを言おうとした時、サイレンがあたりに響き渡った。

『生徒会連合のマザーバードより入電！ 敵部隊の一部が熊本空港10キロ圏を突破、接近しつつあり！ 警戒を要す！』

報告が入るかはいらなかつたと同時に、ほぼ全員が席を立っていた。「どうやら、戦争の時間のようです。各自、よろしく願います」

『はっ！』

「ああそれから報告をひとつ。熊本航空隊は残数8機、ただし全員意気軒昂です。御用の折はぜひどうぞ 解散！」

口の端に苦笑を浮かべながら、全員次々に持ち場に向けて駆け出

していく。再び会議が行われたとき、この場に全員が顔をそろえられるかどうかは分らない。

ただ、そうあるべく努力するだけであった。

(つづく)

## 第16話

1999年5月8日(土) 1130時

熊本市 戸島3丁目付近

今、戦場音楽が慌ただしく奏でられ始めた。整備士たちが数人がかりで偽装ネットを引きはがすと、3機の巨人が姿を現す。再び命を吹き込まれた巨人たちは、のっそりと動き始めた。

「総員、進路上から回避！ ぐずぐずしないで！」

「人工筋肉、解凍準備ヨシ」

「各機とのデータリンク完了、モニター信号受信。強度規定範囲内」  
待機場の隅に急造で組み上げられたモニターを覗き込み、原は軽く眉をしかめた。

「……かなり疲労が大きくなってますね」

脇からの声に振り向けば、森が同じような表情を浮かべて立っていた。少なくとも今の横顔からは、先ほどまでの惚けぶりは感じられなかった。どうやったかは知らないが、意識を戦闘モードに切り替えることに成功したようだ。

原は小さくうなずくと、いくつかのスイッチを調整する。このような状況ではひとりでも遊ばせておく余裕などなかったから、どのような理由であれ、動けるようになったのなら文句はない。

モニターが小隊としての推定戦闘力を示した。先ほどと変わらず、およそ85パーセントを示している。

「……嘘ばかり」

原はどことなく嘲るような口調でさらにいくつかキーを押す。すると、戦闘力の値は大きく変化した。

およそ48パーセント。

これはひとえに、プログラムが基準的な士魂号の戦闘能力、ならびに前回計測時からの増減をもとに計算を行っているのが原因であった。原はそれを最盛期からの比較に直したのである。実態を知

るのなら、こちらの方がより現実的であった。

確かにこの小隊は他にはなし得ないような戦果を挙げてきた。実績自体にはむろん嘘はない。

だがそれは、整備士とパイロットが一丸となり、寸暇を惜しんで士魂号の整備に注力し、およそ望みうる限りの最高の性能を得た結果でもある。それが望めない今、同じような働きを期待されても無茶というものである。

原が訂正した数値を司令部に告げると、善行はただ、分かりました、とだけ返してきた。

「そのあたりはお見通し、か……」

そのくらい理解できねば、小隊指令はつとまらない。原は再びモニターに視線を落とした。

「筋肉疲労度の平均34パーセント、装甲強度は平均62パーセント……戦闘前だったのに、ね」

これは平均的な戦闘直後の状態にほぼ等しい。ほぼ一晩静止状態仮死状態といってもいい。に置いておき、なおかつ可能な限りの調整を施してもここまでが限界であった。

もっとも、過去1週間の1日あたりの平均戦闘回数が3・6回であること、その間オーバーホールを含む大規模整備がまったく行えていないことを考えれば、よくぞここまで回復したともいえる。

だが、問題はそれだけではない。

「士魂号各機、いまさら言うまでもないけれど、TISによる情報提供はほぼ絶望的。頼りは周辺に設置した定置センサーからの情報だけになります。芝村さん、入感はどう？」

『受信強度よろし、問題ない。原よ、センサーの稼働時間は？』

「現状で最大25分、出力を落としても55分がせいぜいってところね」

『了解した。出力を維持せよ』

「分かったわ」

戦闘においてわざわざ目と耳をふさぐのは愚か者のすることであ

る。稼働時間の短さは、土魂号自身のセンサーで代用するつもりなのだろう。

「……うまくいけばいいけどね」

原のつぶやきは揶揄ではなく、いささか願望が含まれたものとなっていた。

\*\*\*

3番機の中は、意外なほどの静けさに包まれていた。機械系動力がほとんどないせいもあって、機内で一番の騒音発生源は空調が発するそれであった。

機内はほの赤い光に満たされている。

「チエツクリスト5、8、13アウト。回路切断。22、24、25もだめ。……あ、こつちも」

パイロット席で速水がつぶやくと、神経接続と脳磁気入力装置から指示が飛んだのか、連動した感覚器官との接続がいくつか消える気配があった。どうしてもノイズが静まらず、このままではジャマーと大差なかったのだ。同時にアラートパネルのランプがいくつか消えたが、相変わらず半分以上は点灯か明滅を繰り返している。

「こちらも似たようなものだ。だが、戦闘能力には問題ない」

「僕らが最大の戦闘能力ってかい？」

「よく分かっているではないか」

淡々とした舞の声に、速水は小さく笑い声を漏らした。それは一面では事実であるが、土魂号の現状を変えることはなく、彼女なりの気分転換以上の意味は持っていない。

それに。

速水は神経接続にわずかに意識を向けた。舞に気付かれないように回線を開くと彼女のライフメーターとリンクする。

舞の足は、相変わらずであった。司令部と合流してから多少治療が行われはしたが、結局湿布をした上で頑丈な添え木と一緒に固定



するくらいのことしかできなかった。

鎮痛剤は、舞自身が拒否した。

「いざという時の反応が鈍くなる」それが彼女の答えであった。

確かに、下手をすれば麻薬とさして変わらない薬など、これから戦う身としては絶対に避けたいところであろう。だがこれで、舞は常に足の痛みを感じながら戦い続けなければならなくなった。それは彼女の体力をより速やかに消耗させることになるだろう。

あまり、長くは戦えないな。

それが速水の結論であった。いかに芝村といえど、彼女もまた人間である。気力と体力は一定の割合でしか代替することができない。いつかは必ず限界が訪れる時がくる。

そうでなくても彼女の右足はしばらく使いものにならない。致命傷でなかったのは幸いだが、こと戦闘に関する限りでは喪失と大差なかった。

となれば、あまり考えたくもないが、この機体に万一のことがあった時のことも考慮しておかねばならない。標準値から考えた場合、彼の操る3番機ははまだ十分な能力を有しているといつてよかったのだが、彼が求めるほどではない。

むろん、少々のハンデならばいつの間にか鍛え上げられた腕でなんとかできるが、奇しくも彼もまた原と同じく、今の機体でこれまで通りのことができるとは考えていなかった。ましてや敵勢力は圧倒的というのも莫迦莫迦しいほどに懸絶している。いくらなんでもこの状態で無事に乗り切れるなどとは、さすがの速水も考えてはいなかった。

ならばどうするか。彼の答えはひとつしかなかった。

何がなんでも舞を守る。土魂号が動くのならばその能力を限界まで振り絞る。使い物にならなくなれば、我が身をもって必ず彼女を連れ帰る。そのためであれば、手段は問わない。必要とあれば自身を楯としてでも。

「……なんだ、簡単なことじゃないか」

余人が言えば大言壮語以外のなにものでもないが、速水がそれを成し遂げることに疑問を抱くものはほとんどいないだろう。

「厚志、何か言ったか？」

「いや、なんでも。ちよつと反応が鈍くなってるなと思ったただだよ」

「そうだな。この機体もあまり無理はかけられん。可能な限り遮蔽物を利用するしかないだろうな」

「そうだね」

会話をかわしながら、速水の口元がほころんだ。舞の判断力がいまだ失われていないこと、そして彼女と意見が一致したことがなんとなく嬉しかったのだ。もっとも、万一おかしな返答が返ってきたとしても、速水はそれにためらいもなく賛成するつもりであった。

と、そこまで考えたところで速水は口元を歪めた。パイロット席に鈍い音が響く。おかしな返答が返ってきて、などとは舞を侮辱していることに気がついたのだ。

「厚志？ 今の音はなんだ？」

「何でもないよ。ちよつと手をぶつけちゃってね」

「そうか？ なんだかそなた、さつきからヘンだぞ？ 戦闘前にそんなことでどうする、ちゃんとせんか」

言葉と裏腹の口調に、速水は再び口元をほころばせると、素直に詫びを口にした。そして神経接続がもたらす拡大された知覚に意識を集中する。

ともかく今は目の前の出来事に全てを集中するべきだった。あのことは実際にそれが起きたときに考えればいい。速水はそう割り切った。

なんとも楽天的に過ぎる考えではあったが、それもまた、彼の強さであったのかもしれない。

士魂号3番機は、僚機と共に山肌に沿うように身を隠しながら、ゆつくりと配置につく。

最初の接触があつたのは、それからおよそ7分後のことであつた。  
(つづく)

## 第17話

かくして、総撤退命令がくだされてから幾度目かの防衛戦が始まった。だが、今回はこれまでの戦闘とは違う、極端に防御的なものとなっていた。

いや、この表現は正しくないかも知れぬ。守勢が強化されているのは、なにも今に始まったことではないからだ。

それまでも防衛戦とは言われ、奔流のごとき幻獣を押し止どめることが戦いの第一義であつたことは間違いない。しかし、その中には可能であれば反撃し、敵を撃滅・人類の版図を回復することも視野に含んでいた。

それが、総撤退命令と共に変化してしまった。

いまや学兵たちの任務は、いかに長く生き延び、敵を引き付け、攻撃の矛先を逸らし、ひとりでも多くの市民が脱出する時間を稼げるかが大事になっていた。矛よりも楯であることをより強く求められている以上、戦術の変化はある意味当然であつた。

もっともそこには、現実的にそれ以外の戦術を行いうも無いという、泣きたくなるほどの現実が濃い影を落としていたのだが。

もうひとつ理由を挙げるとするならば、優先順位は低いとはいえ、脱出するなかには彼ら学兵自身も含まれている。明日を手にするためには今日を戦い、そのうえで生き延びるしか道はなかった。

\*\*\*

幻獣によって強制的に造成されたとはいえ、まだ5121小隊のいる辺りは家屋の残骸や焼け残った樹木などが遮蔽物となり、ある程度視線を遮っていた。それは小隊にとっては格好の遮蔽物であり、同時に現状では敵の動向を見定める際の障害物でもある。痛し痒しといったところであるが、数少ない使い捨て式センサーが代わりに

目となって状況把握に努めていた。

やがて、小隊からは見えなかったが、廃墟の中に建つ九州自動車道の高架、その辺りにじわりと黒い染みが現れ、徐々に広がっていった。漆黒の中に赤い粒をちりばめたようなそれは、のたくり、うごめくような動きとともに徐々に幻獣の形になっていった。

ゴブリンなどの小型種を先頭に、何本かの槍が広がるように進撃する様は、それが自分に関係ないものであればある種の壮観さすらあったかもしれない。だが今、連中は底知れぬ破壊と殺戮の衝動に従い、人類を最後のひとりまで覆滅せんとしているのだ。

「センサー17号に感あり。敵先頭集団、第一次防衛線まであと800メートル。数、およそ120。ほとんどが小型種だが、ゴルゴインクラスを11確認。進撃速度、平均毎時4キロ。合戦準備」

舞の淡々とした声がコックピット内に流れた。やや遅れて短い返答、あるいは応答のジップ音が入る。長々とした打ち合わせなど、少なくとも現段階では不要となっていた。

今、士魂号は戸島山から1キロほど前進した住宅街の中に身を潜めている。彼我の距離は最短で4キロ。廃墟が残っているとはいえずべてを隠してくれるわけではない。山の方が防御に有利なのは分かっていたが、熊本空港に近づけ過ぎてもいけないのだから、それはある意味最後の手段である。どんなときでも予備は必要だし、ここでやることもあった。それに、自分たちはともかく、整備班は機動力のほとんどを失っている。いきなり突っ込まれるのはもう御免であった。

「整備班、準備はどうだ？」

「こちら原。トラックはどうか動くわ。機材の搬入にあと5分ちようだい」

「なんとか3分にしろ」

『了解』

間髪いれぬ返答に、舞はかすかに苦笑した。強制徴発した平たく言えばコード直結で拝借した。どこのものとも知れぬ4トン

トラック。なんの変哲もない装輪車両だけに、ここから先の道路を考えればなんとも頼りないが、皆の命がかかっているとなれば贅沢も言えぬ。

今頃整備班は汗みずくになって機材と格闘しているはずであった。正規の備品はほとんど失い、いざと言う時に備え準備は済ませてあったが、それでもいくばくかの時間は必要である。

それについては舞は何も言わぬ。彼らがなんとか運び出そうとしている機材は、土魂号を今少し動かすのに不可欠なものばかりであった。先に述べた学兵特有に過ぎる兵器、その中でもとびっきりの鬼子である土魂号の予備部品が今後手に入るとは考えるも愚かであった。宝石よりも貴重なそれは、失ってしまったえばこの小隊の戦力はそれこそどん底まで落ち込んでしまふ。たとえ少々時間を費やしても搬出する価値はあった。

もつとも、そこまで土魂号が動けば、の話だな。

センサーが捉えた幻獣の数が1000を越え、なおも天井知らずに増加している現状では、舞の思考はまったく妥当なものであった。ここが5121小隊終焉の地になる可能性も決して低いものではない。

それでも、現状で生き延び、戦い続けるための最善手を放棄する必要を彼女は感じなかった。

センサーが新たな反応を捉え、カウンターは3000を超えた。舞は今一度モニターに目を落とした。

主武装たるジャイアントアサルトは、カバーごと左足に接着している。予備弾倉は規定外ではあるが左肩にふたつ用意してあった。カバーはまだ外さない。

現時点での主役は、両手の中にあった。92ミリライフルが鈍い輝きを放っている。上部から落とし込まれている弾倉には、別の弾倉が逆さにくくりつけられていた。こちらの予備弾薬は右肩だ。

右足には手榴弾が3個、これも規定を無視して無理やりくくりつけられている。万一外れて信管が起動すれば、随分と楽しいことに

なるのは間違いなかったが、だれも気にしてはいない。手榴弾は他にも人間で言えば腹の辺りに数発装着している。必要とあれば数発まとめたまま投げられるようにしてある。いよいよの時には、それなりに役立つはずであった。

一体、何の役に立つのだから。

舞の口元に小さく苦笑が浮かぶ。諦めを知らぬのがモットーであり、世界の危機百連発を歓迎する芝村といえど、ここまで絶対的差があると、笑うしかなくなってしまふ。それでも舞は絶望しない。諦めもしない。死ぬかも知れぬなどとは思考の外である。ある意味楽天的と評すべきか迷うところであるが、当人は至って真剣かつ冷静である。

だが、それにも限度があると思いかけたまさにその時、レシーバーが聞き慣れた声を吐き出した。

『生徒会連合第5121小隊、生徒会連合……ああ、もう、めんどくせえ。おい、だれか聞こえていたら返事しろ！』

『……そんなに騒がなくても聞こえていますよ。こちら5121小隊、善行です』

『おお、あんたか。早速だが熊本航空隊第1中隊、これより貴隊の支援に入る。弾薬はたっぷり持ってきたから安心しろ』

いささか雑音交じりの声とほぼ同時に、装甲を通してさえ響き渡る重低音がかすかに士魂号を揺らして通り過ぎていった。

『ということは、あまり嬉しくない知らせもありそうですね？』

『当たり。悪いがあんたの小隊正面が主攻勢軸と判断された。こちらの推定では最大12000体が向かうものと思われる』

それを聞いた瞬間、舞は思わず吹き出した。まったくもって、この世には笑うしかない事態は確かにあるのだ。

「なんとも楽しくなるではないか。で、話はそれで終わりか？」

『おう、芝村の末姫さんか。まあ、いくらなんでも俺たちだけじゃ手に余るんで、ちつとばかり助っ人を呼んである。……すまんが今から30分、なんとか戦線を支えてくれ。そうすればうちの連中が

あとはなんとかする』

「それは、命令か？」

『いや、いいところ要請ってとこだな』

「だ、そうだ。善行？」

答えが分かっている口ぶりで舞が話を振ると、苦笑の気配がレシーバーを通じて伝わってきた。

『いいでしょう。……各機聞いたな。現在後方より戦車2個小隊を含む自衛軍1個大隊が接近中。友軍の展開が完了するまで、我が小隊はこれより30分、現地点を死守する。ただし本戦闘では持久を第一とする。無理はするな』

「無理ならもうしている。だが了解だ。各員遮蔽物を徹底的に活用せよ。蛮勇はこれを禁ずる。いいな？」

めいめいに返ってくる了解の返事を聞きながら、舞はふと前に視線を向けた。

「厚志？」

「了解。いつでもどうぞ」

『すまねえな』

「瀬崎よ、礼なら帰ってから聞くとしよう。行くぞ」

徐々に視界を占領しつつある幻獣の群れを見やりながら、もしかしたらそれほど悪くないのかもしれない、と舞は思った。

(つづく)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1138e/>

---

熊本空港攻防戦 ～悪夢果つるまで～

2011年1月10日21時25分発行